韓国庭園史略とその代表的な事例

中島義晴・内田和伸

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．宮殿・離宮
Ⅲ．寺院
Ⅳ．住宅・別墅
Ⅴ．楼・亭・台

要　旨　韓国の庭園史を総合的に日本語で記述した書籍・論文はこれまで出版されていない。そのため本稿では、名勝に指定された庭園や文献で知られる事例から重要なものを選び、先行研究をもとに宮殿・離宮、寺院、住宅・別墅ごとにそれぞれの庭園の特徴を整理し、さらに楼・亭・台をくわえて、韓国の庭園史の全体像を把握することを目的とした。

三国時代では高句麗の山城や百済の扶余の王宮跡で方形池が検出されており、百済では仙山に擬した池の島も造られた。統一新羅時代になると東宮の庭園などの検出事例が増える。高麗時代は文献上で多くの庭が知られている。朝鮮時代では景福宮などで花階式庭園など現存する宮殿の庭をみることができる。大韓帝国時代には徳寿宮の石造殿前庭が韓国初の西洋庭園となった。

仏教寺院では、古代に造られた方池や蓮の植えられた池が発掘されている。高麗時代に仏教はもっとも隆盛し、園池が造られた。また、山地伽藍が美しい自然環境のなかに営まれた。朝鮮時代には排仏政策のなか、地方の寺院が勢力を保ち、静かな自然のなかに造られた庭園の遺構が伝わっている。

住宅庭園は主に朝鮮時代の事例が知られており、風水地理説にもとづき、周囲の環境が重視され、敷地内の庭園施設は少なかった。朝鮮時代には官職を務めた多くの知識人が隠逸して別墅を設け、儒教的な倫理観、風水および老荘思想の自然観が反映された庭園が造られた。これらは優れた風景地の楼・亭・台と同様に、学問、詩詠、文人どうしの交流などの場となった。

キーワード　韓国　庭園　宮殿　別墅　楼　亭　台

奈良文化財研究所　文化遺産部

Ⅰ．はじめに

１．韓国の庭園に関する日本語の書籍および学術論文

この文献リスト（第１表）は、韓国の庭園について、2018年までに日本語で書かれた書籍および学術論文を学術情報の検索サービスである「CiNii」を使って検索した結果に、若干数を追加したものである。これをみると、発表の数が多くなるのは1980年代後半になってからである。2012年以前に発表された論文の対象は慶州月池（雁鴨池）をはじめとする古代庭園（およそ８世紀以前）がもっとも多く、そのほかにも別墅や朝鮮時代の宮殿の庭園などに幅広く及んでいたことがわかる。奈文研では2000年代を中心に、日中韓の古代庭園の調査研究に組織的に取り組んだ。奈文研による平城宮東院庭園の発掘調査と修復整備が完了し、その過程で日本の古代庭園に関する研究成果が蓄積されていた時期にあたる。当時、韓国では龍江洞苑池と九黄洞苑池が発掘で検出され、中国でも唐長安城大明宮太液池の発掘調査がおこなわれ、東アジアの古代庭園の新たな研究材料がもたらされた。その後、特に最近の５年ほどの間には、別墅の空間構成や亭からの眺望景観に関する論文が集中的に発表されている。全体を通して、韓国出身の研究者が著者に含まれる論文が圧倒的に多く、最近ではその傾向が特にみられる。

２．韓国に現存する歴史的な庭園

韓国の歴史的な庭園で現存するもののうち、重要なものを第２・３表に示す。第２表は韓国の名勝の一覧である[1]。庭園以外も含まれるが参考のためすべてを掲載し、庭園など、

第１表　韓国庭園に関する日本語の文献

書籍	奈文研飛鳥資料館	『東アジアの古代苑池』	奈文研飛鳥資料館	2005
	尹張燮著；西垣安比古訳	『韓国の建築』（第27章「朝鮮庭園計画」等）	中央公論美術出版	2003
	小口基實	『韓国の庭苑』（閔庚玹「韓国庭苑景観の思想的背景と意匠」、尹国炳「慶州鮑石亭に関する研究」、鄭 瞳旿「韓・日伝統庭園様式の比較研究―池塘庭園を中心に―」が掲載されている）	小口庭園ｸﾞﾘｰﾝｴｸｽﾃﾘｱ	1999
	尹張燮［著］；尹張燮，柳沢俊彦共訳	『韓国建築史』（第二十一章「朝鮮庭園計画」）	丸善	1997
	大韓民国文化部文化財管理局［編］；西谷正［ほか］訳	『雁鴨池：発掘調査報告書』	大韓民国文化部文化財管理局，学生社	1993
	岡崎文彬	『世界の宮苑』	養賢堂	1991
	稲次敏郎	『庭園と住居の《ありやう》と《見せかた・見えかた》：日本・中国・韓国』	山海堂	1990
	岡崎文彬	『世界の造園Ⅱ』	同朋舎出版	1982
	野村孝文	『朝鮮の民家－風土・空間・意匠－』	学芸出版社	1981
論文	王怡，孫秉勲，鈴木弘樹	中国の蘇州庭園と韓国の別墅庭園の心理量分析　建築と庭園の空間構成と空間評価に関する研究　その2	建築計画（2018）	2018
	孫秉勲，鈴木弘樹	中国・韓国庭園における空間構成分布による類型化と心理評価分析　建築と庭園の空間構成と空間評価に関する研究　その1	同　上	2018
	倪奕凡，孫秉勲，王怡，鈴木弘樹	中国・韓国の建築と庭園における空間構成と空間評価に関する研究	人間・環境学会誌 21(1)	2018
	金睿麟，大野暁彦，章俊華，三谷徹	韓国別墅における周辺山稜地形がつくりだす囲繞性の研究	ﾗﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟ研究 81(5)	2018
	孫秉勲，菅野万里帆，鈴木弘樹	開口景の空間構成とマトリクス分析　韓国における建築と庭園の空間評価に関する研究(その2)	建築計画（2017）	2017
	菅野万里帆，孫秉勲，鈴木弘樹	開口景の心理量分析と意識型の類型化　韓国における建築と庭園の空間評価に関する研究　その1	同　上	2017
	金睿麟，大野暁彦，章俊華，三谷徹	韓国別墅における地割の空間構成と形態要素の研究	ﾗﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟ研究 80(5)	2017
	金鍾龍，朴仁煥	大韓民国内に造成された日本式庭園の特性研究	ﾗﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟ研究(ｵﾝﾗｲﾝ論文集) 10(0)	2017

孫秉勲, 菅野万里帆, 金睿麟, 鈴木弘樹	別荘庭園に建てられた建築と庭園の類型化分析　韓国湖南地方における庭園の空間評価に関する研究(その2)	建築計画 (2016)	2016
菅野万里帆, 鈴木弘樹, 孫秉勲, 金睿麟	別墅庭園に建てられた建築の実測調査と空間構成に関する研究　韓国湖南地方における庭園の空間評価に関する研究　その1	同　上	2016
金睿麟, 大野暁彦, 三谷徹	韓国別墅の地割形態の特徴に関する調査および分析	建築歴史・意匠 (2016)	2016
金睿麟, 大野暁彦, 三谷徹	韓国別墅庭園からの可視領域分析による景観特性の研究	環境情報科学学術研究論文集 (29)	2015
孫旻愷, 藤井英二郎	朝鮮時代中期の隠棲者・梁山甫の庭園・瀟灑園の庭園構成と造営意図に関する考察	日本庭園学会誌 (29)	2015
崔賢妊, 下村彰男, 小野良平	『星山別曲』にみる物境, 情境, 意境概念に着目した息影亭の景観構造	ﾗﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟ研究 78(5)	2015
咸光珉, 馬嘉, 孔明亮, 鈴木弘樹, 章俊華	詩文「上林十景」から連想する昌徳宮後園の風景イメージの特性	環境情報科学論文集 ceis28(0)	2014
咸光珉 , 孔明亮 , 三谷徹 , 章俊華	扁額からみた中国・頤和園と韓国・昌徳宮後園空間の特徴と比較	ﾗﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟ研究 76(5)	2013
高瀬要一	韓国雁鴨池庭園再考	日本庭園学会誌 (26)	2012
田中利和子	日本庭園との比較から見た韓国庭園瀟灑園の特質	都市公園 (196)	2012
咸光珉, 孫鏞勳, 三谷徹, 章俊華	扁額からみた韓国の昌徳宮後園空間の特徴について	環境情報科学論文集 ceis26(0)	2012
洪光杓	楽園を象徴する韓国の古庭園、雁鴨池庭園	『東ｱｼﾞｱにおける理想郷と庭園』奈文研	2009
白志星, 徐聖澈, 金根鎬	孤山尹善道の曲水堂庭園の空間構成と水景手法に関する考察	日本庭園学会誌 (21)	2009
金眞成	瀟灑園の空間構成と変遷に関する研究	日本庭園学会誌 (20)	2009
金鉉埈, 権孝姃, 沈愚京	「東闕図」にみられる朝鮮時代の宮殿造園における構成要素の特徴	ﾗﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟ研究 71(5)	2008
朴琉貞	韓日古代苑池の変化からみた九黄洞苑池の性格研究	『日韓文化財論集Ⅰ』奈文研学報 (第77冊)	2008
栗野隆	庭園スタイルの模倣と創造－苑池の空間デザインと古代日韓	同　上	2008
張美娥, 藤井英二郎	朝鮮時代の上流住宅・演慶堂における建築・庭園の空間構成と柱聯の関係について	日本庭園学会誌 (17)	2007
崔孟植, 金眞成［訳］	益山の弥勒寺址池及び扶余の宮南池に関して	日本庭園学会誌 11	2003
鄭泰烈, 斎藤潮	韓国の亭における八景詩と実景との関連性について：八景詩に詠まれた景の配列順序に着目して	都市計画 51(1)	2002
藤井英二郎, 金眞成, 高瀬要一, 白志星, 小野健吉	近年の発掘調査に基づく韓国・百斉の宮南池に関する考察	ﾗﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟ研究 65(5)	2002
兪洪植, 内田和伸, 田福涼	慶州九黄洞苑池遺跡の調査情況	ﾗﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟ研究65(4)	2002
高瀬要一	日本の方池と韓国の方池	『奈文研紀要2001』	2001
張美娥, 藤井英二郎, 李相都	朝鮮時代の王宮・昌徳宮の演慶堂における庭園と建築の関係について	ﾗﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟ研究63(5)	2000
鄭泰烈, 斉藤潮, 金在浩	韓国の伝統的な村落における眺望について−宗家と亭の関係に着目して−	都市計画 48(4)	1999
白志星	韓国・慶州市の龍江洞庭園遺跡について	日本庭園学会誌 7	1999
金眞成, 藤井英二郎	朝鮮時代の儒学者・尹善道の庭園遺構とそこにみる隠遁の思想−日本との比較を視野に入れながら−	日本庭園学会誌 6	1998
金眞成, 藤井英二郎	朝鮮時代の儒学者・尹善道に係わる庭園の構成とその特徴	ﾗﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟ研究61(5)	1998
金真成, 藤井英二郎, 白志星	朝鮮時代の儒学者・尹善道の甫吉島芙蓉洞庭園に関する研究	千葉大学園芸学部学術報告 (52)	1998
白志星	韓国・朝鮮時代の東闕における後苑の宙合楼区域の空間構成と植栽の特徴について	ﾗﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟ研究58(5)	1995
稲次敏郎	韓国庭園考：作庭されない庭園	宝塚造形芸術大学紀要 8	1994
外村中	日韓の假山趣味	造園雑誌 57(3)	1993
白志星［他］, 藤井英二郎, 仲隆裕, 浅野二郎	韓国・李朝の東闕における庭園植栽について−−昌徳宮の外朝および治朝	千葉大学園芸学部学術報告 (46)	1992
外村中	『作庭記』にいう枯山水の源流	造園雑誌 56(1)	1992
白志星［他］, 藤井英二郎, 仲隆裕, 浅野二郎	韓国・昌徳宮の燕朝における庭園植栽について	造園雑誌 55(5)	1991
浅野二郎, 白志星, 藤井英二郎	韓国・慶州の雁鴨池について	造園雑誌 54(5)	1990
元貞喜, 白在峯	韓国・朝鮮時代の伝統的池塘庭園の作庭手法に関する研究	同　上	1990
西垣安比古	背山臨水して「すまう」こと －俛仰亭宋純をめぐって－	日本建築学会計画系論文報告集 409(0)	1990
尹武炳	韓国の古代苑池	『発掘された古代の苑池』橿原考古学研究所編、学生社	1990
浅野二郎, 白志星, 藤井英二郎	韓国 扶余の宮南池について	造園雑誌 53(5)	1989
稲次敏郎, 金賢善, 申珠莉	韓国庭園考：作庭されない庭園(口頭による研究発表,第36回研究発表大会)	ﾃﾞｻﾞｲﾝ学研究 (75)	1989
稲次敏郎	中国園林様式成立の思想的脊景について：および韓国庭園との関連	ﾃﾞｻﾞｲﾝ学研究 (73)	1989
稲次敏郎	韓国伝統的住居・庭園の構成要因に関する基礎的研究	ﾃﾞｻﾞｲﾝ学研究 (71)	1989
金永彬, 安啓福	古文献分析による韓国における別墅の概念に関する研究	造園雑誌 49(4)	1985
ミン K. H., 吉田博宣［訳］	韓国の伝統的な風景式庭園,特に樹石庭園について	造園雑誌 49(2)	1985
鄭朧昨	三国時代の庭園	『探訪日本の庭 別巻一』月報第11号、相賀徹夫編著、小学館	1979
金東賢	雁鴨池発掘参観略記	『佛教藝術 109』毎日新聞社	1976
田治六郎	朝鮮庭園に見る方池と其の起源に就て	造園雑誌 2(3)	1935
原熙	朝鮮新羅臨海殿庭園(一)	園芸學會雑誌 3(2)	1932

※表中の「建築計画」「建築歴史・意匠」は各年の日本建築学会大会学術講演梗概集の分冊である。

特に歴史文化に関係の深いものを太字にした。第３表には、そのほかの代表的な庭園またはその遺構のうち、前節に挙げた論文などで研究対象とされている重要なものを挙げた。

第２表　韓国の名勝

番号	指定名称	所在地	類型	指定基準
1	溟州青鶴洞小金剛	江原道江陵市	自然	地形地質景観
2	巨済海金剛	慶尚南道巨済市	自然	地形地質景観
3	莞島正道里九階灯	全羅南道莞島郡	自然	地形地質景観
6	蔚珍仏影寺渓谷一円	慶尚北道蔚珍郡	自然	地形地質景観
7	麗水上白島・下白島一円	全羅南道麗水市	自然	地形地質景観
8	甕津白翎島頭武津	仁川広域市	自然	地形地質景観
9	珍島の海割れ	全羅南道珍島郡	自然	地形地質景観
10	三角山	京畿道高陽市・ソウル特別市	自然	地形地質景観
11	青松周王山周王渓谷一円	慶尚北道青松郡	自然	地形地質景観
12	鎮安馬耳山	全羅北道鎮安郡	自然	地形地質景観
13	扶安彩石江・赤壁江一円	全羅北道扶安郡	自然	地形地質景観
14	寧越魚羅淵一円	江原道寧越郡	自然	地形地質景観
15	南海加川村の棚田	慶尚南道南海郡	産業	地形地質景観
16	醴泉回龍浦	慶尚北道醴泉郡	自然	地形地質景観
17	釜山影島太宗台	釜山広域市	自然	地形地質景観
18	小毎勿島灯台島	慶尚南道統営市	自然	地形地質景観
19	**醴泉仙夢台一円**	**慶尚北道醴泉郡**	**歴史文化**	**地形地質景観**
20	**堤川義林池及び堤林**	**忠清北道堤川市**	**歴史文化**	**伝統の森、文化景観／眺望景観**
21	**公州コマナル**	**忠清南道公州市**	**歴史文化**	**文化景観／眺望景観**
22	**霊光法聖鎮の森**	**全羅南道霊光郡**	**歴史文化**	**伝統の森、天然記念物**
23	**奉化清涼山**	**慶尚北道奉化郡**	**自然**	**歴史文化景観**
24	釜山五六島	釜山広域市	自然	地形地質景観
25	**順天超然亭園林**	**全羅南道順天市**	**歴史文化**	**造園建築／園**
26	**安東白雲亭及び開湖松の森一円**	**全羅北道安東市**	**歴史文化**	**伝統の森、歴史文化景観**
27	**襄陽洛山寺義湘台と紅蓮庵**	**江原道襄陽郡**	**歴史文化**	**歴史文化景観（関東八景）**
28	**三陟竹西楼及び五十川**	**江原道三陟市**	**歴史文化**	**歴史文化景観（関東八景）**
29	九龍嶺旧道	江原道襄陽郡	産業	地形地質景観
30	竹嶺旧道	慶尚北道栄州市	産業	地形地質景観
31	聞慶トッキビリ	慶尚北道聞慶市	産業	地形地質景観
32	**聞慶セジェ**	**慶尚北道聞慶市**	**産業**	**歴史文化景観**
33	**広寒楼苑**	**全羅北道南原市**	**歴史文化**	**造園建築／園**
34	**甫吉島尹善道園林**	**全羅南道莞島郡**	**歴史文化**	**造園建築／園（芙蓉洞天、洞天石室）**
35	**城楽園**	**ソウル特別市**	**歴史文化**	**造園建築／園（双流洞天）**
36	**ソウル付岩洞白石洞天**	**ソウル特別市**	**歴史文化**	**造園建築／園（白石洞天）**
37	**東海武陵渓谷**	**江原道東海市**	**自然**	**歴史文化景観**
38	**長城白羊寺白鶴峰**	**全羅南道長城郡**	**自然**	**歴史文化景観**
39	南海錦山	慶尚南道南海郡	自然	地形地質景観
40	**潭陽瀟灑園**	**全羅南道潭陽郡**	**歴史文化**	**文化景観／園池**
41	順天湾	全羅南道順天市	自然	自然景観
42	**忠州弾琴台**	**忠清北道忠州市**	**自然**	**歴史文化景観**
43	済州西帰浦正房瀑布	済州西帰浦市	自然	地形地質景観
44	丹陽島潭三峰	忠清北道丹陽郡	自然	地形地質景観（丹陽八景）
45	丹陽石門	忠清北道丹陽郡	自然	地形地質景観（丹陽八景）
46	丹陽亀潭峰	忠清北道丹陽郡	自然	地形地質景観（丹陽八景）
47	丹陽舎人巌	忠清北道丹陽郡	自然	地形地質景観（丹陽八景）
48	堤川玉筍峰	忠清北道堤川市	自然	地形地質景観（丹陽八景）
49	忠州鶏立嶺路ハヌルジェ	忠清北道忠州市	産業	自然景観
50	**寧越清泠浦**	**江原道寧越郡**	**歴史文化**	**地形地質景観**
51	**醴泉草澗亭園林**	**慶尚北道醴泉郡**	**歴史文化**	**造園建築／園**

52	**亀尾採薇亭**	**慶尚北道亀尾市**	**歴史文化**	**歴史文化景観**
53	**居昌捜勝台**	**慶尚南道居昌郡**	**自然**	**歴史文化景観（安義三洞天、猿鶴洞天）**
54	高敞禅雲山兜率渓谷一円	全羅北道高敞郡	自然	地形地質景観
55	茂朱九千洞一士台一円	全羅北道茂朱郡	自然	自然景観
56	**茂朱九千洞巴洄・水心台一円**	**全羅北道茂朱郡**	**自然**	**歴史文化景観**
57	**潭陽息影亭一円**	**全羅南道潭陽郡**	**自然**	**歴史文化景観**
58	**潭陽鳴玉軒園林**	**全羅南道潭陽郡**	**歴史文化**	**自然景観**
59	海南達磨山美黄寺一円	全羅南道海南郡	自然	自然景観
60	**奉化青巌亭及び石泉渓谷**	**全羅北道奉化郡**	**歴史文化**	**歴史文化景観（青霞洞天）**
61	**俗離山法住寺一円**	**忠清北道報恩郡**	**歴史文化**	**歴史文化景観**
62	**伽耶山海印寺一円**	**慶尚南道陜川郡**	**歴史文化**	**歴史文化景観（紅流洞天）**
63	**扶余クドゥレ一円**	**忠清南道扶余郡**	**歴史文化**	**歴史文化景観**
64	**智異山華厳寺一円**	**全羅南道求礼郡**	**歴史文化**	**歴史文化景観**
65	**曹渓山松広寺・仙岩寺一円**	**全羅南道順天市**	**歴史文化**	**歴史文化景観**
66	**頭輪山大興寺一円**	**全羅南道海南郡**	**歴史文化**	**歴史文化景観**
67	**ソウル白岳山一円**	**ソウル特別市**	**自然**	**歴史文化景観**
68	**襄陽河趙台**	**江原道襄陽郡**	**自然**	**歴史文化景観**
69	安眠島コッチの夫婦岩	忠清南道泰安郡	自然	地形地質景観
70	**春川清平寺高麗禅園**	**江原道春川市**	**歴史文化**	**歴史文化景観**
71	**南海只族海峡竹防簾**	**慶尚南道南海郡**	**生活**	**歴史文化景観**
72	智異山韓信渓谷一円	慶尚南道咸陽郡	自然	地形地質景観（白武洞天）
73	**太白倹龍沼**	**江原道太白市**	**自然**	**歴史文化景観**
74	大関嶺旧道	江原道江陵市	産業	地形地質景観
75	寧越韓半島地形	江原道寧越郡	自然	地形地質景観
76	寧越の立石	江原道寧越郡	自然	地形地質景観
77	済州西帰浦山房山	済州西帰浦市	自然	自然景観
78	済州西帰浦セソカク	済州西帰浦市	自然	自然景観
79	済州西帰浦ウェドルゲ	済州西帰浦市	自然	自然景観
80	**珍島雲林山房**	**全羅南道珍島郡**	**歴史文化**	**歴史文化景観**
81	**浦項龍渓亭及び徳洞の森**	**慶尚北道浦項市**	**歴史文化**	**伝統の森、歴史文化景観**
82	**安東晩休亭園林**	**慶尚北道安東市**	**歴史文化**	**自然景観**
83	沙羅オルム	済州特別自治道	自然	自然景観
84	霊室奇岩及び五百羅漢	済州特別自治道	自然	自然景観
85	咸陽尋真洞龍湫瀑布	慶尚南道咸陽郡	自然	自然景観
86	**咸陽花林洞居然亭一円**	**慶尚南道咸陽郡**	**歴史文化**	**歴史文化景観**
87	**密陽月淵台一円**	**慶尚南道密陽市**	**歴史文化**	**歴史文化景観**
88	**居昌龍岩亭一円**	**慶尚南道居昌郡**	**歴史文化**	**歴史文化景観**
89	**和順臨対亭園林**	**全羅南道和順郡**	**歴史文化**	**歴史文化景観**
90	漢拏山白鹿潭	済州特別自治道	自然	自然景観
91	漢拏山ソンジャクチワッ	済州特別自治道	自然	自然景観
92	済州訪仙門	済州特別自治道	自然	自然景観
93	抱川禾積淵	京畿道抱川市	自然	自然景観
94	抱川漢灘江モンウリ峡谷	京畿道抱川市	自然	自然景観
95	雪岳山飛龍瀑布渓谷一円	江原道束草市	自然	自然景観
96	雪岳山土王城瀑布	江原道束草市	自然	自然景観
97	雪岳山大乗瀑布	江原道麟蹄郡	自然	自然景観
98	雪岳山十二仙女湯一円	江原道麟蹄郡	自然	自然景観
99	雪岳山水簾洞・九曲潭渓谷一円	江原道麟蹄郡	自然	自然景観
100	雪岳山蔚山岩	江原道江原道	自然	自然景観
101	雪岳山飛仙台及び千仏洞渓谷一円	江原道束草市	自然	自然景観
102	雪岳山龍牙長城	江原道麟蹄郡	自然	自然景観
103	雪岳山恐龍稜線	江原道	自然	自然景観
104	雪岳山内雪岳万景台	江原道麟蹄郡	自然	自然景観
105	**青松注山池一円**	**慶尚北道青松郡**	**自然**	**歴史文化景観**
106	江陵龍淵渓谷一円	江原道江陵市	自然	自然景観
107	**光州環碧堂一円**	**光州広域市**	**歴史文化**	**歴史文化景観**
108	**江陵鏡浦台及び鏡浦湖**	**江原道江陵市**	**歴史文化**	**歴史文化景観**
109	**南楊州雲吉山水鍾寺一円**	**京畿道南楊州市**	**歴史文化**	**歴史文化景観**
110	**槐山華陽九曲**	**忠清北道槐山郡**	**自然**	**歴史文化景観**
111	**求礼鷲山四聖庵一円**	**全羅南道求礼郡**	**自然**	**歴史文化景観**
112	**和順赤壁**	**全羅南道和順郡**	**自然**	**歴史文化景観**

第３表　そのほかの代表的な庭園など

名称	所在地	作庭時代
宮南池	忠清南道扶余郡	三国
龍江洞庭園遺跡	慶尚北道慶州市	三国
定林寺跡	忠清南道扶余郡	三国
弥勒寺跡	全羅南道益山郡	三国
月池（雁鴨池）	慶尚北道慶州市	統一新羅
鮑石亭跡	慶尚北道慶州市	統一新羅
景福宮	ソウル特別市	朝鮮
昌徳宮	ソウル特別市	朝鮮
徳寿宮	ソウル特別市	朝鮮
茶山草堂	全羅南道康津郡	朝鮮
船橋荘	江原道江陵市	朝鮮
瑞石池（石門林泉庭）	慶尚北道英陽郡・醴泉郡	朝鮮

３．本稿の目的

第１表でみたように、韓国の庭園史を総合的に日本語で記述したものはこれまで出版されていない。そのため本稿では、名勝に指定された庭園や重要な事例を網羅的に選び、時代ごとにそれらの概要を述べ、先行研究をもとに宮殿・離宮（第Ⅱ章）、寺院（第Ⅲ章）、住宅・別墅（第Ⅳ章）に分け庭園の特徴と事例を整理し、さらに楼・亭・台（第Ⅴ章）もくわえて、韓国の庭園史の全体像を把握することを目的とした。なお、本稿では『最新東洋造景文化史』など、文末に示す参考文献を基本文献として利用した。

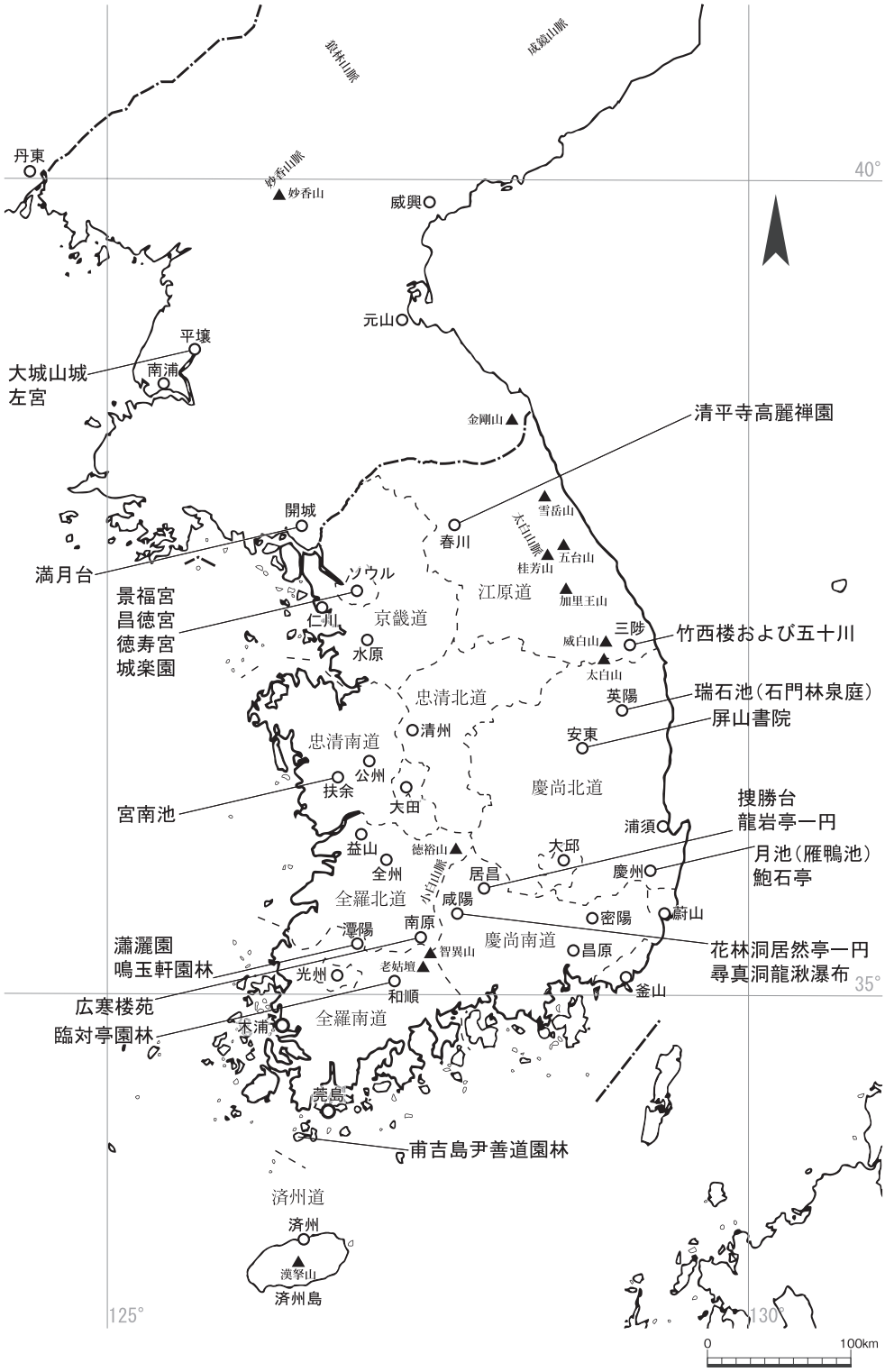
４．韓国の各時代の庭園史の大まかな流れ

次章から韓国の歴史的な庭園について種類別に述べるが、ここでは代表的な事例、および作庭に関連する思想・宗教の状況に着目しながら、歴史の時代順に大まかな流れを整理しておく。

先史時代の造園の現存事例はないが、文献によれば4,000年以上前の檀氏朝鮮の魯乙王が囿を造り、つづく箕子朝鮮の時代には、誼讓王が後苑を築いたという。その後の衛氏朝鮮、および漢に編入された楽浪郡の時代には、造園に関する文献は伝わっていない[2]。

高句麗（BC37～668）・百済（BC18？～663）・新羅（BC57？～657）が鼎立した三国時代（350頃～668）には各国の宮殿・離宮において、また中国から伝来した仏教の寺院において庭園が造られた。現在まで往時の姿のまま存続したものはないが、一部は遺跡として伝わっている。『三国史記』によると、百済の武王（600～641）の御苑には神仙島のある池があった。朝鮮半島では古くから神仙思想が宮殿の庭園に取り入れられ、朝鮮時代まで続いた。

統一新羅時代（668～935）には、都・慶州において、674年に造営された東宮の苑池とされる月池（雁鴨池）が、当時の日本の庭園に大きな影響を与えた。そのほかの遺構に鮑



第１図　主な庭園などの所在地

石亭跡の流觴曲水宴の流盃渠がある。

高麗時代には、高麗（918～1392）の都が開京に置かれた。主として文献によって満月台などの宮殿・離宮や寺院の庭園が知られる。また、この時代には地方でも生活した士大夫が景勝地に別墅を営み、庭園が造られるようになった。その背景には陰陽五行思想とそれにもとづく風水地理説があった。風水地理説は統一新羅時代に中国からもたらされ、高麗時代には貴族などに、朝鮮時代には庶民にまで広まった。北の山を背にして南に開け、姿のよい川を見渡し、その向こうに形の整った山並みを望む地が「背山得水」の理想郷とされ、「明堂」と呼ばれる。これにもとづき都市・集落、および個々の宅地・墓地などが選地された。また、高麗時代には宋との交流があり仏教が最盛期を迎え、王室、貴族から民衆まで広く受け入れられた。江原道の慶雲山麓に建つ清平寺の文殊院では渓谷沿いに禅苑が造られた。

朝鮮時代（1392～1910）には多くの庭園が造られ、現存する庭園の件数や種類ももっとも豊富である。また、絵図に描かれ往時の様相が具体的に理解できる事例もある。李氏朝鮮は中央集権的封建国家であり厳しい身分階級制度が敷かれ、特権階級の官僚である両班は王族とともにこの時代の庭園文化を担った。儒教は国教に定められ、風水地理説とともに作庭にも大きな影響を与えたが、その一方で仏教は抑圧された。

宮殿の庭園では、漢陽（現在のソウル）に都が置かれ、景福宮（1395年創建）・昌徳宮（1405年創建）・徳寿宮に造られた宮苑が現存している。陰陽五行思想、天円地方の世界観にもとづく方池円島など、日本にはみられない独特な構成をもつ。

この時代には両班によって多くの別墅が営まれており、現存するものでは1530年代に潭陽に築造された瀟灑園、17世紀半ばに莞島に造営された尹善道園林のほか、潭陽の鳴玉軒、和順の臨対亭、ソウルの城楽園などが名高い。このような別墅は眺望に優れた場所が選ばれ、自然地形を基盤として、流れや池が整えられた。

山や海、川など美しい自然景観に面する場所には楼・亭・台が設置された。楼・亭は5世紀の記録にみられ、高麗時代に増加し朝鮮時代に最盛期を迎えた。楼・亭・台は地方に隠遁した文人たちが過ごした景勝地のなかの開放的な空間であり、数多くの詩文も残されている。代表的な現存例に江原道三陟の竹西楼（起源は高麗時代）、潭陽の息影亭などがある。また、地方の教育施設である書院にも、門を楼形式とし、優れた自然景観を望むことができた安東の屏山書院晩対楼などの例がある。安義三洞は捜勝台、居然亭など、数多くの楼・亭・台が一定の範囲に集中し、地域の名勝として当時から一体的に認識されていた例である。

この時代に著わされた庭園に関する本には、画家の姜希顔（1417～1464）による園芸書『菁川養花小録』（1474年）、文官の洪萬選（1643～1715）による経済生活の指針書『山林

経済』（17世紀末から18世紀初）、文官の徐有榘（1764～1845）による農書『林園経済志』（19世紀前半）などがある[3]。

1910年から1945年は日本統治の時代であった。そのため、宮殿やその庭苑が破壊されたが、終戦後に復旧が開始され、現在も事業が続けられている。また、住宅・寺院などで日本風の庭園が造られたこともあり、1930年代に木浦に造成された李勲東庭園などが現存している。

Ⅱ．宮殿庭園

１．古代の宮殿庭園

（１）古朝鮮時代以降の宮殿の庭園

古朝鮮時代の王宮遺跡は未だ発見されていない。造景に関わる記述を『三国遺事』にみると、修道王（～紀元前615）が浿江（現在の大同江）のなかに神山を築き、その上に楼台を造ったという。造園に関する記述では、『大東史綱』第１巻の檀氏朝鮮紀に、魯乙王が即位後に、初めての国の庭園である囿を造り、動物を育てたという内容がある。これは約3900年前の庭園に関する初めての記述である。また、同書には誼襄王元年（BC590）頃に清流閣を後園に建て、群臣とともに宴を開いたという記述や、済世王10年（BC180）頃には冬至の数日後に庭園の桃と李が満開になったという記述がみられる。しかしながら、いずれも断片的な記述で、史実性は低い。

（２）三国時代の宮殿の庭園

三国時代になると宮殿、山城、寺院などで平面形が方形の方池や曲線部をもつ曲池が認められる。方池は貯水目的のものもあるがいずれにも存在し、曲池は宮殿などの重要な施設で採用されたことなどが指摘されている[4]。

①高句麗

『周書』高麗伝に王は普段、平地の王宮に住まうが、一旦急が迫れば山城に退避すると記されているように、都には平常時の拠点で王宮のある平地城と非常時の軍事防御の山城が一組になると考えられている。

紇升骨城[5]　高句麗の始祖朱蒙、東明聖王は最初の根城を卒本にある「紇升骨城」とし（BC34）、ここが以後約400年の都となる。この城が中国遼寧省の桓仁地方にある五女山城で、峻険な断崖に囲まれた山頂の平坦部を主城とし、絶壁の間の一部区間にだけ石積みの城壁を築いた特異な山城である。城内には章台、池、井戸、建物跡がある。城内の池は天池と呼ばれ、周囲には城壁を囲うように石を積んだ。

この山城と組む平地城として下古城子土城が注目されている。

国内城と丸都山城　高句麗は瑠璃王22年（AD３）に卒本から鴨緑江中流地域の吉林省に

ある集安に遷都した。

平地城は、東西約830 m、南北約610 m、周囲2,686 mの長方形の国内城である。城壁は高さ5～6 m、基底部幅は10 mほどで、土や砂利で固め、城壁の内外の面は石で築造し、城壁の外側には幅10 m余りの堀が掘られていた。瑠璃王が国内城に遷都した翌月の11月に狩猟で5日間宮殿に戻らなかったため、王の補佐役である陜父が諫めたところ、王は陜父を庭園担当の賤職に左遷したという記録があり、既に高句麗の初期に国内城には庭園を担当する官職があったことが知られている。

一方の山城が、その北西に2.5 km離れた山城子山にある丸都山城（慰那巌城）である。丸都山城は前期平壌城の山城の大城山城とともに高句麗でもっとも規模の大きな山城の一つである。山の稜線と絶壁に沿って築かれた、長さ約8 kmの城壁が巡る包谷式の山城である。高さが7～8 mにもなる城壁や5つの城門跡、見張り台、瞭望台、行宮跡のほか、一辺約37 mの石積みの方形池などがみつかっている。

前期平壌城と大城山城　高句麗は長寿王15年（427）に国内城から南方の平壌城に遷都した。場所は現在の平壌市街地ではなく、6 kmほど東北にある大城山城付近であり、平原王28年（586）までを前期平壌城という。

平地城の前期平壌城を安鶴宮に充てることが多かったが、1964年の安鶴宮跡発掘調査報告書では高句麗古墳3基を壊して造営されていることが報告されており[6]、千田剛道はこの古墳が427年以前に造営されたものとは認められず、出土瓦などから遺跡は高麗時代のものとしている[7]。これを前提に田中俊明は安鶴宮遺跡を『高麗史』文宗35年にみえる「左宮」に充てている[8]。ここでは、これらの説に従う。平壌の平地城が安鶴宮でないとすると、清岩里土城（清岩洞土城）が有力と指摘されている[9]。

清岩里土城は平壌市街地の東北郊外、大同江の北岸にある。東西約2 km、南北約600 mで、半月形を呈する。城壁は外側の高さが約5 m、内側の高さが約2.5 m、上部幅が約1 m、基底部の幅が約17 mである。城内では瓦葺きの建物跡が検出されている。

一方の山城である大城山城は、大同江の北岸にある高さ274 mの高地を中心に、6つの峰を城壁で囲む長さ7 kmの包谷式山城である。城内では、章台跡、倉庫跡、行宮跡など有事の際に敵と戦うのに必要な一連の建築物、構造物、施設などが検出された。また170余りの池跡があり、池の平面形態は長方形、三角形、円形などとなっている。池の底は、泥と荒石を混ぜて固めた上にさらに大きな荒石を敷き、水が地面に浸み込まないようにしていた。

長安城　高句麗は陽原王8年（552）から平原王28年（586）まで35年をかけて、牡丹峰南の大同江と普通江の間、現在の平壌市街地に後期平壌城である長安城を建設し、586年に遷都した。高句麗が668年に滅亡するまで、この場所が都となった。

長安城は山城と平地城をあわせた形態で、三国時代の山城式と中国式都城を折衷したものと理解され、城壁全体の長さは約23km であった。長安城は大きく４つの城に分けられる。万寿台を囲む内城を中心に、北には牡丹峰を囲む北城があり、内城の南には蒼光山、解放山、鞍山の外に中城があり、中城の南の平原に広い外城がある。内城には王宮があり、北城は宮城である内城を防御するための山城である。

②百済[10]

漢城期　風納土城はソウル市南東部に位置し、漢江に面した南北1.3 km、東西0.6 km、周囲3.5 km の土塁で囲まれた遺跡で、漢城期王城の慰礼城である。南方に近接する夢村土城は微高地に位置し、同時期の王家の重要な城郭や緊急時の防塁と考えられている。

『三国史記』辰斯王７年（391）正月には宮室を修造し、池を掘って山を造り、珍しい禽類を飼い、珍しい草花を植えたという。

熊津期　百済は475年に都を高句麗に奪われ、熊津（現在の公州市）に遷都し、泗沘へ遷都するまで63年間をここで過ごした。『三国史記』蓋鹵王21年（475）９月に「国人をすべて徴発して土を積み上げさせ城を築き、宮室、楼閣、台榭などを造ったが、すべてが壮麗だった」と記される。

熊津期の山城である公山城の南門の前面にある広い丘陵地から幅約１m にもなる礎石が発見されたことから、この場所に宮殿があったと考えられる。

東城王22年（500）の春には、宮殿の東側に臨流閣を建て、高さ50尺にもなった。また、池を掘り、珍しい鳥を育てたという。同年４月には臨流閣で宴会を披いている。城内東南の高台中腹部で「流」銘瓦をともなう建築遺構が検出されて、臨流閣跡と考えられている。

泗沘期　百済は熊津から南方の泗沘へ538年に遷都した。戦乱時の防御の拠点が扶蘇山城である。一方、扶余の王宮跡は扶蘇山南麓の官北里遺跡と考えられており、大型の建物跡などのほか、東西10.6 m、南北6.2 m の長方形で、深さ１～1.2 m の石積みの池が検出されており、蓮の葉と茎がみつかり、蓮池であったことが知られている[11]。

この時期の苑池としては宮南池が知られている。『三国史記』武王35年（634）３月には宮殿の南に池を堀って、20余里水を引き入れ、四方の岸には柳を植え、池のなかに島を築き、方丈仙山に擬えたと記される。また、義慈王15年（655）２月には王宮の南に望海亭を造ったという。なお、宮南池と呼ばれる池が1966年に整備されているが、遺構を表現したものではなく、宮南池の遺構の発見が俟たれる。

扶余から20 km ほど錦江を下ったところに益山はある。益山王宮里遺跡は全羅北道益山市王宮面王宮里山一帯に位置し、発掘調査の結果、百済末期の武王（在位600～641）の時代の王宮跡で、のちに寺院が建てられたと考えられている。平面形は長方形で、城壁は南北約490 m、東西約240 m である。宮城の南半部は殿閣区域である。一方、北半部は後苑

区域となり検出された建物跡は少なく、方形礎石の建物跡のほか、長方形石積施設、環水溝、曲水路、瓦裂排水路、城の外郭に水を送る出水施設、出水口などがあり、水と関連した多様な施設が集中的に確認された。後苑区域は百済時代から高麗時代に至るまで継続的に使用されていたことがわかっている。

なお、この武王の時期にあたる620年、『日本書紀』に百済から来た路子工と呼ばれる技術者が宮殿の南の庭園に須弥山を造り、呉橋を造ったという記録がある。

（3）統一新羅[12]

新羅は高句麗、百済とともに鼎立した三国時代を経て、668年に三国を統一し統一新羅時代を迎えるが、三国時代の明確な庭園遺構は知られていない。新羅が滅亡する935年まで首都は金城（高麗時代に現在の慶州に改称）にあった。最初の王宮金城は月城の東北にあり、101年に月城に遷り、以後、月城は王の居所と政治の中枢となった。月城は南川の北岸に面した独立丘陵上にあり、自然地形を利用して周囲に土塁を巡らせた城郭である。

東宮　月城の東北に苑池が造成されて「月池」「月池宮」と呼ばれ、朝鮮時代には「雁鴨池」と呼ばれた。『三国史記』文武王14年（674）２月には、宮殿のなかに池を掘り山を造り、草花を植え、珍しい禽獣を飼ったという。また、孝昭王６年（697）９月、恵恭王５年（769）３月、敬順王５年（931）２月には臨海殿で宴会を設けたこと、『三国史記』職官志には東宮所属の官府として月池典、月池嶽典、龍王典、洗宅などがあることが記されている。

1975・1976年の発掘調査では池と整然とした建物群がみつかった。池は東西180ｍ、南北200ｍで、西岸と南岸は直線からなり、北岸と東岸は出入りの多い複雑な汀線からなる。護岸は急勾配で切石を積み上げている。池のなかには三つの島があることから三神山に擬えたものとみられる。池の水は東南部の石組溝、石槽、滝を経て給水され、北岸の石組暗渠から排水される。西岸の建物群は中門、前殿、中殿、後殿が中軸線上に配置され、それらと池に張り出す建物が回廊で結ばれている。これらの建物群が東宮と考えられている。出土遺物は金属工芸品、建築部材、仏像仏具など三万点にも及ぶ。

北宮　月城の真北、北川の南岸に城東洞遺跡がある。そこでは東西180ｍ、南北100ｍの範囲において、等間隔で東西一列に並ぶ大小４棟の建物跡とそれらを区切って取り囲む長廊跡などが検出され、出土瓦には雁鴨池と同系の宝相華文磚が出土している。恵恭王２年（767）の「北宮」に比定する考えが有力といわれる。

国立慶州博物館敷地内苑池　月城の南東、国立慶州博物館敷地内の東北隅で東西に長い三日月形の苑池遺構が検出されている。規模は長さ15ｍ、幅５ｍ、深さ1.3～２ｍで、南北方向に堤が２つあり、池を三等分している。護岸は石積みで池底には川砂利を敷いている。この苑池が南宮に属する可能性もあるという。

鮑石亭　慶州盆地の南、南山西麓に鮑石亭と呼ばれる庭園遺構がある。これは『東国通鑑』に城の南に離宮があったとの記録から離宮の庭園施設と考えられている。統一新羅時代末期、『三国史記』景哀王４年（927）９月、景哀王が鮑石亭で宴を張っていた時、後百済の甄萱に捕えられた場所である。

遺構は鮑のような平面楕円形の石組水路である。水路幅は31 cm、深さ21～23 cm、長さは22 m で、46の石材で構成されており、導水部には石臼状の水受け石がある。導水方法は不明であるが、流觴曲水宴に用いたものと考えられる。

そのほかの庭園遺構　龍江洞苑池遺跡は京域の北方、北川の北約1.5 km にある遺跡で、池の一部とそのなかの南島、北島の一部が確認されている。池は北側の調査区外に広がるため、池は南北方向に長い隅丸方形と推定される。南岸は33 m、西岸は65 m 以上、東岸は38.6 m 以上になる。東岸には建物跡があり、島と繋がる橋があったとみられている。全容の解明が俟たれる。

九黄洞遺跡の苑池遺構は、芬皇寺の東に隣接する敷地でみつかっている。池の規模は南北46.3 m、東西26.1 m で、西岸から西へ入江が延びて南に曲がっている。池のなかの北と南に大小の島を配する。池の西側には伽藍の方位とは異なる建物跡が整然と配置されているが、遺跡の性格はまだ明確ではない。

２．高麗時代の宮殿庭園

（１）開京の都城と宮殿

高麗の首都である開京は現在の北朝鮮の開城市にある。後高麗の弓裔が都を置いた場所で、太祖王建が弓裔を追い払った後の919年から1392年まで、途中モンゴルの侵入によって江華に遷都した39年間を除いて高麗王朝の都であった。都は四方を山に囲まれ、北西には松嶽山があり、その南側の丘陵地帯に位置した。建国当初の国内情勢は地方豪族の反乱の可能性があったため、防御に脆弱な平地よりも盆地型の都市が有利だったと考えられている。また、開京には遷都以前からの都市施設の蓄積もあったことも無視できない。そして、仁宗元年（1123）に高麗を訪れた宋使節の一員である徐兢の『高麗図経』には「高麗人はもともと書を知り道理に明るいが、陰陽の説に拘り、そのため建国する際には必ずその地の形勢をみて、長久の計をなすべき場所であるとなれば、その地に定めるのである」[13]と書いている通り、風水も都の決定に大きく影響している。

開京の城郭は松嶽山の南に展開される勃禦塹城、その東に位置する内城、それらの東と南に広く巡らされた外城である羅城からなっている。

勃禦塹城は896年に高麗太祖王建の父が管理をしながら建てたもので、息子の王建を城主とした。その後新羅が滅びると、太祖元年（918）に王建が高麗を開国しこの場所に都を定めた。勃禦塹城はなかほどに東西方向の城壁があり、南の皇城と北の宮城に分かれる。

皇城と宮城をあわせてこの王宮を満月台と呼んでいる。月を観賞するところという意味の満月台と呼ばれる宮殿があり、これが人口に膾炙し、いつからか王宮全体を満月台と呼ぶようになったものである。都は海抜20～30 m であるが、正殿跡は50 m に達する。

羅城は11世紀初め、契丹の侵入を契機に築城された。羅城は昔の開京の外城として現在も開城の市街地周辺を取り囲んでいる。北西の松嶽山の山頂（488 m）から東へ延びる尾根を使い、南へ下り、徳岩峰を城内に入れ、沙川を渡り、南の龍岫山を城内に入れ、西の山の稜線に沿って再び北の松嶽山へと登っていく。松嶽山の山頂にある一部の石城を除いてはすべてが土城で、幅12尺、高さ27尺であった。

羅城の内城は高麗末の1391～1393年にかけて紅巾賊と倭寇の侵入を契機とし築城されたもので、勃禦塹城の東から南東を防御するものである。

王宮内については『高麗図経』に当時の勇壮華麗な姿がよく記録されている。中枢部は会慶殿中心の外殿、長和殿中心の内殿、北西の寝殿で構成され、ほかの宮殿とは異なり、地形によって軸を変えて自然の地勢を最大限生かした独特な建物の配置をおこなっていた。このような配置には風水の影響があり、都城の中世的展開とみることができよう。会慶殿の真南に昇平門があり、その南に光明川があり、毬庭という撃毬場があった。ここは各種の儀礼もおこなう重要な空間だった。光明川は宮殿と官庁一帯を分けたものと考えられている。

（2）宮殿の庭園

この時期の宮殿や離宮の庭園については文献上でいくつか知られている。

後苑　後苑は満月台の北側地域で、会慶殿などが南北に並ぶ列の西側の建物群の北の丘陵頂部一帯と考えられている[14]。後苑には賞花亭、山呼亭、賞春亭の四阿があった。賞花亭の用途ははっきりとはしないが、山呼亭では星を祀る醮祭、祈雨祭、仏教行事などが開かれた。賞春亭でもおなじようにそのような祭祀がおこなわれたが、主に各種宴会が披かれた。文宗24年（1070）に賞春亭で曲水宴をおこなったという記録がある。賞春亭は花で名高く、春には牡丹、シャクヤクを観賞し、秋にはキクの香りを楽しんだという。この賞春亭の前に殿閣があり、高麗末に至るまで宴会をおこなう場所だった。恭愍王22年（1373）、李穡の『牧隠詩』の内容をみると、賞春亭の横に八角殿を中心にまた一つの花園があったことがうかがわれる。

東池　東池は高麗の初期から末期にかけて存在しており、池の周囲で珍しい動物を飼い、宴会に相応しい建物や景観を備えているなど、多様な利用がなされる後苑の機能を有していたことが次のいくつかの記録からわかる。景宗２年（977）、宮殿の庭園に大きな園池を築造したこと。靖宗２年（1038）12月には東池で飼っていた鶴、アヒル、山羊などの飼育に高額の費用がかかることや、東池の規模は楼船を浮かべるほどで、池と楼閣を中心とし

た庭園であったこと。文宗10年（1056）９月には王が皇子と王族のために東池の楼閣で宴を催していること。睿宗10年（1115）９月には王自らが東池で武人を選抜したこと。恭愍元年（1352）７月初めには倭寇の船を捕まえ、この東池に浮かべて観覧したこと、などである。

東池は1999年の発掘調査で確認されており、会慶殿の東側築台から240ｍ東にあり、南北270ｍ、東西190ｍで周囲に堤を造って造成されているという[15]。

紗楼一帯　粛宗４年（1099）４月に王が紗楼に出向き、牡丹の詩を詠んで臣下に反物とお茶を下賜したという。楼閣の周囲の牡丹が咲く頃、花見の宴を披いて花を観賞しながら詩を読むという饗宴の場所として使用されていた。このような利用は顕宗が宮殿の楼閣の前に牡丹を植えたという記録まで遡れるのであろう。

延英殿一帯　睿宗は延英閣と宝文閣を延英殿の北側、慈和殿の南側に造った。この二つの楼閣は講義や宴会をおこなう場所として頻繁に使用された。睿宗11年（1116）に金仁存が記した『清燕閣宴記』によると、石を積んで釈迦山を造り、庭園の端には水を引いて池を造り、聳え立った山と四方に溜まった水はまるで中国の洞庭湖や、呉の国の会稽山のようで、なんともいえない興を呼び起こすと記している。

花園　英祖の時には宮殿の西南に花園２ヵ所を設置したという。『高麗史』から豪華で異国的な花園が造られていたことがうかがえる。

穆清殿一帯　毅宗は膨大な規模の土木工事をおこない、華やかな宮殿、殿閣、庭園を造り、その勢威を誇示した。宮殿内に穆清殿をはじめとする離宮、慶明宮、重興殿、仁智齋、館北別宮、玄化寺、寿昌宮などを造り、それに相応しい華やかな庭園も整えた。『高麗史』毅宗10年（1156）10月には、善救宝、養生亭などを造り、庭園の東側の隅に一つの楼閣を造った。善救宝とは百姓（国民）の病気を広く治療するため薬剤を保管した建物で、その横に養生亭という四阿を建てて、その周りには珍しい石や花を植えて美しく飾ったという。

（３）離宮の庭園

寿昌宮庭園　寿昌宮は離宮として使用されていたが、契丹の侵入で本来の宮殿が焼失すると修復されるまで宮殿として使用された。位置は満月台の南側、小西門の内側にあり、本来の宮殿に次ぐ規模であった。宮殿の後方には後園があって、釈迦山を築き、その近くに萬寿亭を造った。四阿の後ろには撃毬ができる広い広場を造っている。このような寿昌宮も蒙古の侵入により焼失したが、その後修復されたという記録が残っており、のちにここで朝鮮の太祖李成桂が即位した。

寿寧宮庭園　寿寧宮は寿昌宮に隣接した宮殿で、中国の元の国の職人に作らせたガラスの瓦を宮殿の建物の屋根に葺いていたという。また、殿閣の近くに牡丹、シャクヤクなどを植え花が咲く頃には花見の宴を披いていたという。

寿徳宮庭園　高麗の歴代王のなかで離宮や庭園をもっとも多く造ったのは18代の毅宗である。毅宗は宮殿の東の臣下の邸宅を取り上げ、安昌宮、貞和宮、延昌宮、瑞豊宮を造り、毅宗11年（1157）正月に離宮である寿徳宮を完成させた。また、民家50軒をつぶして太平亭を造り、周りに有名な草花や珍しい花樹を植え、珍しいものを左右に陳列した。毅宗はここで宴会や仏事を頻繁におこなった。この南には池を掘り、観蘭亭、養貽亭、養和亭を造った。養貽亭では遠くから水を引き、泉を造ったという。さらに歓喜台、美成台を造り、水を引いて滝を造り、釈迦山も築いて贅を極めた庭園にした。

龍徳宮庭園　非常に勇壮で豪華な建物や、花壇や曲水宴などについての記録があるが詳しいことはわからない。

左宮　安鶴宮跡と呼ばれる遺跡は平壌市街地から北東へ12 km、大城山城のある大聖山の南麓の緩やかな傾斜地に位置する。安鶴宮跡は前述の田中俊明説によれば高麗時代の「左宮」にあたる。宮城の城壁は一辺が620 m、周囲の長さが2,488 m の土城で、平面形は菱形に近く、宮城内の総敷地面積は約38万㎡である。宮殿の南側の３つの門のうち、中央の門がもっとも大きく、その門を基準に南北中心軸上に南から南宮、中宮、北宮と回廊で囲まれた前庭のある宮殿が連なり、満月台中心部と似ている。北東隅には東宮が置かれる。

ここでは数ヵ所で庭園が検出されている。そのなかでもっとも規模の大きな庭園は南宮の西側の庭園で、西門と西外殿の間に丘陵があり、その脇に東西約80 m の落花生形の池がある。ここには配置された景石や亭跡、長い建物跡が検出されている。

北宮の北側には築山があり、その上には亭跡と考えられる建物跡が検出されている。また、東宮の南側にも庭園があり、長い小川と地下水が湧き出る泉があった。さらに、安鶴宮跡東南隅には東西約70 m の方池が検出されている。

長源亭一帯　高麗時代も三国時代と同じように正宮以外に何ヵ所かに離宮を造った。平壌を西宮と改編し、開京に負けないくらいの施設や機関が設置され、歴代の王が頻繁にそこに滞在した。『高麗史』によれば礼成江の南に長源亭という四阿を建ててそこで休養し、四阿の周りには菊、牡丹、楊などを植え、竹林もあったという。

衆美亭一帯　毅宗21年（1167）３月に開城の東山麓に衆美亭という四阿を造り、庭園を整えた。四阿の南には石と土で堤を築き、水を溜めて舟遊びができるように湖を造り、アヒル、雁などを育て、丘の上には茅亭を造った。

萬春亭一帯　萬春亭は毅宗が宮殿で使用する瓦を焼かせた窯があった場所を離宮としたところである。礼成江の支流を止めて湖を造り、その周辺には松、竹、美しい草花を植えた。建物は延興殿、霊徳亭、寿御堂、鮮碧齋、玉竿亭など７ヵ所あり、湖に架けた橋を僑錦花と呼んでいた。延興殿では宴会が催された。

延福亭一帯　延福亭は満月台の東に位置する龍淵寺の南にあり、周囲には高い岩壁と鬱蒼

とした木々の絶景があった。ここもまた、川に堤を築いて湖を造って舟遊びができるようにし、四阿の周りには珍しい花や木を植えていたという。

3．朝鮮時代および大韓帝国時代

（1）漢城の都城と宮殿

高麗の武将李成桂は恭譲王を擁立して全国を掌握し、1392年に高麗王位を簒奪して高麗王に即位したことで朝鮮王朝が成立した。太祖3年（1394）、朝鮮王朝の太祖李成桂は都を開京から漢城に遷した。王の居所である宮殿、祖先の霊を祀る宗廟、国の基本となる土地と穀物の神を祀る社稷壇、それらを結ぶ街路の建設が始められた。都城内の施設配置では『周礼』考工記の「左祖右社」の原則にもとづき、宮殿を中心にして東に宗廟、西に社稷を置いた。また、「前朝後市」の原則にもとづき、宮殿の南に官庁街、北に市場を配置するところではあるが、宮殿が北岳山の南山麓に位置したため市場も宮殿の南側となった。

翌年からは漢城を取り囲む城壁（総延長約17 km）と城門の工事にとりかかった。城壁は地形に沿った不整形なものであり、街路も碁盤の目のようなものではなかった。城壁には東西南北4つの大門を開き、その間に4つの小門を設け、都の中央には鐘閣を置いた。陰陽五行説で東西南北と中央という五方位にそれぞれ配当される五徳である仁義礼智信に対応して、東大門に興仁之門、西大門に敦義門、南大門に崇礼門、鍾閣に普信閣（19世紀に入ってから）と名付けられた。ただし、北大門には何故か智の字は用いなかった。

景福宮は太祖4年（1395）から文禄の役（壬申倭乱）で焼失する宣祖25年（1592）までの約200年、正宮として使われた。景福の出典は『詩経』で、命名は鄭道伝である。昌徳宮は太宗5年（1405）に離宮として造営された。寿康宮は国王の母親のための宮殿として世宗元年（1419）に造営され、成宗19年（1483）には昌慶宮と改称された。西に国王の正殿を置き、東には国王の母親を指す東の朝廷という意味の東殿を置くという観念にもとづき、東西軸で昌徳宮の東に昌慶宮は配置された。

文禄の役の後、宣祖は宣祖26年（1593）に成宗の実兄、月山大君の邸宅を貞陵洞行宮とし、光海君3年（1611）には宮殿として慶運宮と名付けたが、仁祖元年（1623）に仁祖が即位式をした後、270年余り宮殿として使われることはなく、大韓帝国になり、高宗の末年（1907）に慶運宮は徳寿宮に改名された。昌徳宮は光海君元年（1609）に再建をはじめ、光海君6年（1614）に完成し正宮の役割を担った。一方、景福宮は文禄の役後270年余り再建されることはなかったが、高宗の父、興宣大院君の主導により高宗4年（1867）に再建された。西別宮は光海君9年（1617）に離宮として建設され、その後慶徳宮と呼ばれたが、英祖36年（1760）に現在の慶熙宮の名称となった。

王宮のなかは大きく、官僚たちが執務する官庁が置かれた外朝、王が臣下たちと政治をおこなう治朝、王と王妃が居住する燕朝に分けられる。『周礼』考工記の宮室制度のなか

の三朝三門という条項と関連させて理解することができる。それぞれが行閣と呼ばれる回廊や塀で区切られて、治朝には正殿である勤政殿および便殿である思政殿、燕朝には寝殿である康寧殿および交泰殿が置かれた。王宮では王は南を向いて政治をすること（天子南面、子坐午向）が大原則であり、主要な建物群は南北軸上に配置される。

（2）景福宮[16]

①宮殿内中軸線上の建物配置

景福宮の正門が光化門で、その名は『尚書』堯典「光被四表　化及万方」に由来する。宮殿の東門は建春門、西門は迎秋門といい、東の春、西の秋も陰陽五行思想にもとづくものである。光化門は石造基壇上に木造二重楼閣造の建屋がのる。基壇には門道が三つあり、中央が王と王妃、東が文官、西が武官のためのものであった。

光化門前の両脇には景福宮再建時に造られた、海駝（ヘテ）と呼ばれる想像上の動物の石造物が置かれる。ヘテは人の理非を判断する神獣で、誤っている人を角で刺すということから、王は誤った政治をしてはならず、臣下は王を助けて懸命な政治をおこなわなければならないとされる。

光化門の内側に弘礼門があり、これを入ると川が西から東へ流れる。風水の上では明堂水と呼ばれ、王宮では禁川や錦川と呼んだ。禁川護岸には4匹の石造の天鹿が川からの鬼神の侵入を防いでいる。禁川を永済橋で渡ると勤政門があり、これを入ると正殿である勤政殿に至る。

勤政殿は二重の月台の上に低い基壇を設けて建つ韓国最大の木造建築で、桁行5間（約30 m）、梁間4間（約20 m）の規模をもつ。北面廂の中央に御座が設けられ、その背後には王権を象徴する、東西に日月を配した日月五峯屏が置かれる。

勤政殿の左右には青銅香炉が置かれる。また、月台には石欄干が取り巻いており、欄干の柱には四神、十二支といった動物像が設置され、時刻や方位など時空（宇宙）を表す。さらに、火災除けの水を張ったドゥムと呼ばれる鋳鉄釜が置かれる。月台中軸線上の階段の踏道には鳳凰、飾りには瑞獣が刻まれている。

殿庭は日射の照り返しを低減するために荒く削ったという花崗岩を敷き詰めており、中央に御道が通り、その左右には臣下が階級別に整然と並ぶための品階石が立てられている。勤政殿とその前庭は王の即位式や文武百官との朝会、外国使節との謁見など国家的な行事をおこなったところであり、身分的な違いを王座との高さの違いと距離によって実感し、儀礼を通して秩序をあきらかにする空間であった。

勤政殿を北に降りると思政門があり、それを入ると思政殿が置かれている。王の公式な執務室にあたり、東の万春殿、西の千秋殿とはもともとは廊下で繋がっていた。

思政殿の北の康寧門を入ったところにある康寧殿は王の寝殿である。康寧は『尚書』洪

範の五福の一つに由来する。康寧殿を囲むように二殿と二亭が配置されており、北の両義門を入ると王妃の寝殿である交泰殿に至る。康寧殿と交泰殿は1917年に昌徳宮の寝殿が焼失し、熙政堂と大造殿として1920年に移築したため1995年に復元したものである。

②建物配置とその背景の思想

以上のように宮殿内の政治に関わる場所では基本的に樹木は植えられてこなかった。建物群が囲む中庭ではそこに木を植えると「困」という字、門の外からみると「閑」という字となるため避けられてきたのである。

では、宮殿内の政治がおこなわれる場所で樹木を用いず造景するのに、建物はどのように配置していたであろうか。現業的部門では当然機能的な配置が求められたことは想像に難くないが、重要な施設が配置される宮殿の中軸線上では、一定の思想にもとづく整然とした建物配置がなされた。以前の報告でも詳しく言及している[17]が、『勤政殿実測調査報告書』[18]では次のように指摘している。

「重創された景福宮の核心部は正殿〔北極星〕→便殿三軒〔三光之庭〕→王寝殿五軒〔五帝座〕順に配置され天文図の星座を模倣したといえる。次は方向を反対にして解釈すると、王妃寝殿〔太極〕→門〔陰陽〕→王寝殿五軒〔五行〕順に配置されていて、太極図説とそのまま一致しているといえる。結論的にいって、重建配置計画案は易理と陰陽五行など建築外的思想をもとにしている点で朝鮮初期以来の伝統を継承しているといえる。」

宮殿の建物配置や墓室の天井が天文を象るのは始皇帝以来の伝統である。渡辺信一郎[19]は「魏晋洛陽城宮、北魏洛陽宮、北斉鄴宮、南朝建康宮は、闕門（三門）－太極殿－顕陽（昭陽）宮・後宮（掖庭）－華林園の南北軸構成をとる。そのイデオロギー的基礎は、天上の天文秩序にあり、紫微垣に囲繞された北極五星と句陳六星を地上に再現したものである。」としており、その後の宮殿でも継承されていることを示している。

王妃寝殿の交泰殿の「交泰」の出典は『易経』泰卦であり、象伝に「天地交わるは泰なり」とあり、王家の子孫繁栄を願う名称である。ここで生じた気は、陰陽を意味する両義門を通り、その南にある康寧殿を中心とした五つの建物群に至る。それらには五行に因んだ名称がつけられており、そこで響きあった気はその南の五嚮門を出て、思政殿、勤政殿へと政治の舞台へ流れていくのである[20]。

このように宮殿の表側には基本的に樹木はないが、建物配置とそれぞれに与える建物の名称で意味のある空間を構成し、さらに添景物などが空間の意味を深めさせる造景をおこなった。その含意の背景には天文思想や陰陽五行思想、風水思想、儒教的な礼や孝の思想、中国古典にもとづく考えなどがあったのである。こうした宮殿の造営思想は唐長安城では妹尾達彦が、平城宮では内田和伸が、紫禁城では田中淡がそれぞれ指摘しており[21]、朝鮮

王朝末期の宮殿造営の造形においても伝統的な設計手法が適用されたといえる。

一方、宮殿の裏手の王室の私的な空間などには樹木のある庭園が造園され、そこでは思想的背景も異なるものだった。以下、改めて論じてみよう。

③景福宮の造園空間

交泰殿後園（峨嵋山）　峨嵋山は太宗12年（1412）に景福殿の西に慶会楼を建てて池を掘った時に出た土を使って造った山で、その名は中国の道教や仏教の聖地の一つに由来する。高宗２年（1865）の景福宮再建時に交泰殿が王妃の空間となったため、南斜面を四段の花階式庭園（階段式花壇）としたものである。三方を塀で囲み、長台石（細長い切石）を積んで段を造り、交泰殿のオンドルにともなう六角柱の装飾煙突４基、怪石、石咸池（石造水鉢）、松、灌木、草花を配す。石咸池に刻まれた涵月池、落霞潭の名称や怪石は仙山を思わせる。また、怪石は穴が開いている状態が陰、立った状態が陽であることから陰陽が調和した状態ともされて愛でられてきたという[22]。

装飾煙突の側面には、下段に邪気を払うという想像上の動物や蝙蝠が、その上の白地には吉祥や長寿を意味する動植物（十長生=日、月、雲、山水、石、松、鶴、鹿、亀、不老草）、四君子と呼ばれる梅、菊、蘭、竹や卍の文様が、さらに上には長寿を意味する鶴や福を象徴する蝙蝠、魔除けの鬼神などが、最上段には長方形の白い下地に唐草文様が刻まれる。この庭園では長寿や福が意匠上のコンセプトとなっている。

なお、交泰殿の東の慈慶殿は王が母や祖母などに慶事があることを願う意味をもつ建物で、その北にはオンドルの煙突10本を壁状にまとめた十長生模様煙突がある。

香遠池　咸和堂と緝敬堂の北側の香遠池は景福宮の後苑にあたる部分にある。文禄の役前には後苑に翠露亭を造り、池を掘って蓮を育てているという記録がある。現在、東西約76m、南北約70ｍの方形の園池で、丸い中島に香遠亭という六角形二階建ての四阿がある。香遠の名は宋代の儒者周敦頤の『愛蓮説』に由来する。現在の池は再建後に掘られたもので、高宗が朝夕散策を楽しんだ場所である。池の水源はその北西角の井戸の湧水を利用し

第２図　景福宮交泰殿後園

第３図　景福宮香遠亭園池

ている。池の北側に乾清宮があり、北側から中島に渡る翠香橋があったが、1953年に南岸に遷された。

慶会楼園池　勤政殿の西側にある慶会楼園池も後苑にあたる機能を有する。創建当時は小さな楼閣であったが、太宗12年（1412）、池を拡張し大規模な楼閣として建造した。文禄の役で焼失し、高宗４年（1867）に再建された。慶会楼は桁行７間、梁行５間の重層建築で、一階は高い石柱だけを48本立てて、二階に床を敷いて宴会場とした。床高は中央に向かって高くなる三段で構成され、中央の３間（×１間）は天地人を、その周りの12間は１年の十二ヵ月を、もっとも外側の24本の柱は二十四節気を表す。建物の柱間や柱の数が時空を象徴するのである。このような見立てあるいは設計方法は唐の明堂の規定や北京の天壇の祈念殿などにみることができる。この慶会楼は方形の池のなかの大きな方形の島に立地しており、東岸から三つの橋が架かり、三光（日、月、星）を意味した。この島の西には長方形の島を南北に配し、松を植えて万歳山と呼んだ。池には島が三つあることから蓬莱、方丈、瀛州の三神山を意図した、一池三島の伝統的な庭園様式とみることができる。

第４図　景福宮会慶楼園池

（３）昌徳宮の造景空間[23]

①宮殿建物の配置と庭

昌徳宮は太祖５年（1405）に太祖が離宮として造営をはじめ、正殿の仁政殿は世宗元年（1419）に竣工している。文禄・慶長の役で焼失するが、光海君元年（1609）に再建工事を始め５年後に完成している。昌慶宮とあわせて東闕と呼ばれた。漢城の鎮山は北岳山で、そこからの山脈（尾根）が都城内で四つに分かれ、北側の一つの峰である鷹峰山が主山となり南へ延びる。その南端に宗廟が配され、途中に昌徳宮と昌慶宮が配置されている。両宮殿と北にある後苑を描いた東闕図は東西南北を意識して整然と建物を描くが、昌徳宮は中枢部が南北中軸線に対して左右対称に配置された景福宮とは異なり、地形にあわせて施設群を配置したため、いくつかの軸線がそれぞれ異なる方位となり、自然と調和した宮殿景観を造っていることが特徴である。

敷地南西隅に正門である敦化門が南面して開く。桁行５間、梁行２間の重層門で、広い月台をともなう。朝廷に３本の槐を植えてもっとも高い官職にある三公の位置を定めたという中国古典『周礼』での故事に因んで、敦化門を入ると槐が植えられている。錦川に沿って北上すると右に石造二連のアーチ橋である錦川橋が現れる。この橋にも玄武やヘテ

といった想像上の動物の石造物が置かれ、鬼面が嵌め込まれる。東岸に渡り、正面の進善門、それを入って左の仁政門を経て、正殿仁政殿に至る。

仁政殿の殿庭には薄石が敷き詰められ、御道の左右には正祖元年（1777）に品階石が配された。正殿の背後は丘陵部の土留を兼ねた五段の花階になっており、現在その南は東側からのみ行閣（回廊）が正殿まで延びて、左右の対象を破っている。

各官庁は宮殿の外側に置かれたが、正殿の東、南、西にも置かれ、西側のみ1990年以降復元されている。王が日常業務をおこなった宣政殿では、地形を考慮して正殿の東行閣の東隣に南面して設置されており、南の宣政門から複道閣（渡り廊下）が取り付けられている。その東には寝殿である熙政堂と大造殿が仁政殿と宣政殿とは軸線の方位を少しずらして南北に並ぶ。現在の大造殿（1920年、景福宮の交泰殿を移築）の北側にも花階式庭園がある。

熙政堂の東には東宮があったが、その東に憲宗が側室を迎え、憲宗13年（1847）に楽善齋、翌年に錫福軒、壽康齋を西から東へ並べて建てた。楽善齋は自身のための、錫福軒は側室のための、壽康齋は大王大妃である純元王后のための住まいであった。楽善齋は梨本宮から嫁いだ李方子女史が1989年まで住んでいた。これらの建物の北側には傾斜地を利用して花階式庭園が設けられている。

楽善齋の後園は数段で構成され、オンドルにともなう装飾された煙突、灌木が配される。段下には怪石を据えた怪石鉢が置かれ、その正面に玉山、小瀛州と刻むことから庭園は仙山を意識したものといえる。庭園の階段を上り装飾された塀に開く門をくぐると、高台の上には六角形の四阿、平遠楼（現在の名称は上凉亭）がある。同様に、錫福軒には閒静堂が建つ。

②後苑[24]

昌徳宮と昌慶宮の北側の丘陵に造られた後苑は、禁苑、北苑、内苑、上林苑とも呼ばれ、朝鮮末期からは秘苑と呼ばれていた。現在の面積は約30 ha である。自然を愛で、散策したりするほか、舟遊び、詩や学問の論議、科挙の試験、軍事訓練、弓術行事、宴会、祭祀、新兵器火車の発射実験、天文観測設備の設置、学術政策機関の設置、農業体験、農耕儀礼の籍田親蚕、年中行事など様々な事柄がおこなわれ、古代中国の後苑からの伝統的な機能を継承している。庭園の造営は昌徳宮と同じ太宗５年（1405）から始まり、世祖が拡張し、燕山君が整備に努めた

第５図　昌徳宮楽善齋後園

が、文禄・慶長の役で荒廃した。光海君が復旧をおこない、仁祖がさらに整えた。庭園は南北に延びる丘陵の尾根から東へ派生するいくつかの尾根の間の谷地を使い、特徴ある景観が造られている。以下、それぞれについて述べる。

宙合楼一帯　宙合楼一帯は朝鮮時代後期、正祖が即位した正祖元年（1777）に造営された。西に入り込む谷地奥の湧水点を堰止めて池を設け、右手の傾斜地に楼閣などを配した構造となる。池は芙蓉池と呼ばれ、東西約34.5 m、南北約29.4 m の方形で、直径 8 m ほどの円島を配する。護岸は垂直の切石積み護岸である。西岸には谷筋からの水路が取り付き、龍頭から給水され、その南に四井記碑閣、南岸中央には池に張り出す芙蓉亭、池の東に暎花堂を配する。暎花堂は王が立ち会う科挙がおこなわれた建物である。

楼閣前は花階式庭園になっており、一段目の上には翠塀と呼ぶ生垣があり、その中央に王が利用する魚心門、その左右に臣下が利用する小門が設けられている。階段を上ると宙合楼の正面に至る。宙合楼の一階の奎章閣は王の書画を保管し、二階の宙合楼は図書閲覧や研究に充てられたが、純祖以後、宴会や休息の機能が強まり、現在は建物全体を宙合楼と呼んでいる。その南西に書香閣、西に祈雨亭、北東に千石亭を配す。書香閣は本来、御真影を保管するところであったが、のちに皇后の養蚕場となった。祈雨亭は酔香亭といったが、ここでの祈雨が功を奏して改名したものである。

庭園の池の南から芙蓉亭、中島、魚心門、宙合楼が南北中軸線上に配置され、統一感が与えられている。魚心の出典は故事成語の「水魚の交わり」であり、暎花堂での科挙を経て、政治の補佐に欠くべからざる臣下を得たいという王の思いが表れている。宙合の出典は『管子』で天地の調和や天人の合一を意味する。その宙合楼からは天円地方の宇宙観を表す島と池を俯瞰する構造になっているのである。

演慶堂と愛蓮池一帯　宙合楼の立地する高台の北にも西に入り込む谷地があり、奥で北西に向きを変えて深く入っていく。谷が向きを変えたところで南向きに立地しているのが演慶堂で、演慶堂は純祖28年（1828）頃に士大夫の屋敷に倣って造営された建物群である。その南を東へ水路が流れて方池に入り、そこから引水した水は低い滝を経て、谷地の入り口の北寄りに設けられた愛蓮池に北西隅から入る。肅宗が顕宗 3 年（1662）に池のなかに中島を造って愛蓮亭という四阿を建てたというが、現在その島はなく、方形の池の北岸に接した池のなかに同名の亭が建ち、近くに怪石が立つ。池の周囲に閉塞施設はなく開放的であるが、池の南は段を

第 6 図　昌徳宮後苑宙合楼園池

設け、三方を塀が囲み各所に門を開く。下段には特に施設はないが、東門は花崗岩の一枚板を「コ」字形に加工し、不老門と刻む。その区画の南門を入ると南半が高台となっており、倚斗閣、韻磬居が東西に配されており、その南は花階になっている。

尊徳亭一帯　愛蓮池北側の尾根は北西に登っていき、その東側の谷地一帯に尊徳亭などが配置されている。谷地の下流側にある池は形が朝鮮半島に似ていることから半島池と呼ばれる。その東岸で池にせり出して扇形の観纜亭が建ち、西岸の小山に勝在亭が建つ。池に流れ込む水路には石橋が架かり、その上流にも池があり、この池に面して尊徳亭が建つ。仁祖が仁祖22年（1644）に建てたもので当初は六面亭と呼んだ。平面が六角形で、裳階状の下屋が付き、それを６ヵ所で支える太い柱はなく、各々三本の細い柱が建つ瀟洒な亭である。『東闕図』では方池に面して尊徳亭が、方池の奥に堤を経て半円形の池がそれぞれ描かれている。1900年代に作成されたと推定されている『東闕図形』では現在のような池の形を描いているため、直線と曲線を組み合わせた現在の池はこの時までに改変されたものであることがわかる。谷奥の尾根には小規模な清心亭と小さな氷玉池が配置されており、正祖や純祖らが月光を詠った詩を残している。

玉流川一帯　玉流川一帯の施設は尊徳亭のある谷地の北側で東西に延びる谷地の奥に位置する。仁祖14年（1636）、巨大な岩である逍遥岩を削って平らにし、その上に平面「U」字形の溝を掘り、その溝から流れ落ちる小さな滝を造った。この流れを使って流觴曲水宴が披かれた。削り残した逍遥岩にはこの一帯を詠んだ肅宗の五言絶句と、玉のように清く流れる小川を意味する「玉流川」が刻まれる。周囲には井戸、翠寒亭、逍遥亭、オンドル部屋のある籠山亭、太極亭、清漪亭が配置される。清漪亭は苑内唯一の草亭で、周囲を小さな水田とし、親耕礼をおこなったところである。建物は四本柱であるが収穫後の藁を使って円形の屋根を葺いており、天円地方を象っているのであろう。隣の太極亭とともに天地の調和を願う名称の建物である。

（４）徳寿宮の造景空間

第７図　昌徳宮後苑逍遥亭

日清戦争が1894年に勃発し、翌年には日本が清国に勝利して、下関条約を締結した。これにより日本は清国に対して、冊封関係にあった朝鮮が独立国であることを認めさせた。1897年、李太王は儒者の建言に従い、国号を朝鮮から大韓に改名すること、建陽から光武に改元すること、圜丘壇で祭天の儀式を挙行することといった古典的な事柄をおこなって皇帝に即位した。慶運宮（現

在の徳寿宮）が政治の舞台として再び注目されるのは大韓帝国時代になってからの、高宗在位末年の約10年間であった。

高宗は乙未事変（高宗王妃閔妃明成皇后殺害事件）が起きた翌年、ロシア公館に避難し、ロシア公館の隣にあった慶運宮に居所を移した。この前後から宮殿内には多くの建物が造られ、徳寿宮は威容を整えた。1906年には正殿の中和殿が完成し、大安門を修理して大漢門と改名し、宮殿の正門とした。1907年に高宗は純宗に譲位し、純宗は昌徳宮に居を移したが、高宗は慶運宮にとどまり、名称を高宗の雅号を用いた徳寿宮に変えた。

第 8 図　徳寿宮石造殿前庭

1910年には大規模な西洋式の石造建造物である石造殿を建て、その南にフランス式沈床式庭園（サンクガーデン）を造った。円形と方形を組み合わせた池を掘り、中央に水盤型の円い噴水を造り、その四方に 4 匹の青銅製のかわうその噴水を配した。庭園には大きな木は植えず、石造殿と軸線をあわせて左右対称とすることにより効果的に荘厳している。

Ⅲ．寺院

1．概観

仏教が朝鮮半島に本格的に伝えられたのは 4 世紀であり、高句麗・百済・新羅に寺院が創建された。それらのうち、百済の二つの寺院遺跡で方池、新羅の寺院遺跡で蓮が植えられた池が発掘されている。統一新羅時代にも寺院が建設されたが、注目されている庭園遺構はない。

高麗時代に仏教はもっとも隆盛し、多数の寺院が建設され地方の一般民衆にも広まった。風水地理説から大きな影響を受け、深山幽谷で四神相応の景勝の地には山地伽藍が数多く創建あるいは再建された。中心建築は南面したが、伽藍配置は地勢に従って自由なものとなった。また、中門は楼閣形式となり、その下の階段を経て台地に至るようになった[25]。楼閣は門楼の役割を担うとともに、宗教的な行事の場としても使われ重要な役割を担っていた。高麗時代の寺院の大部分は消滅したが、石塔や一部の建造物の遺構が残る。庭園については、開城の北方にある松岳山に 9 世紀に創建され、12世紀初めに重修された安和寺の庭園が『高麗古都徴』に記録されており、そのほかに11世紀創建の玄化寺と13世紀の龍華寺に池があったという[26]。また、仏教の禅思想と道教の無為自然思想から、静寂な自然のなかに茅亭と園池が造られた[27]。

朝鮮時代には排仏政策がとられ、都市部の平地伽藍はまったくみられなくなったが、地方では山地伽藍が勢力を保った。ただし、この時代の山地伽藍は新たに創建されたものはなく、以前からの寺院が再建または修理されたものがほとんどであった[28]。

２．事例

（１）百済の方池[29]

これまでに発掘調査がおこなわれた百済後期の寺院遺跡のうち、次の２ヵ所で参道を挟んで東西に並ぶ二つの方池が出土している。いずれも発掘後に復元整備された。

忠清南道扶余郡扶余邑の定林寺は、６～７世紀に百済が都を置いた扶余の中心部に建設された寺院遺跡である。1984年に南門跡から南へ5.3 m の位置で方池が発掘された。東池は東西15.3 m×南北11 m、西池は東西11.2 m×南北11 m であり、深さはともに0.5 m であった。護岸の一部は石積みで、池の堆積土からは蓮の葉と茎の炭化物が出土した。池の創建年代は６世紀中頃と推定されている。

全羅北道益山郡金馬面の益山弥勒寺は、首都の機能を補完するために複都とされた益山の寺院遺跡である。この寺院は７世紀初めに弥勒山の南麓に創建され、大規模な伽藍の中央に巨大な木造塔、東西に石造九層の塔が建っていた。方池は伽藍の南正面に設けられた幅50.5 m の参道の両側から発見された。東池は東西51 m×南北48 m、深さ1.2 m、西池は東西54.5 m×南北41 m、深さ1.6 m に及ぶ。これも護岸の一部が石積みであった。この池が造成された時期は寺の創建期より下り、統一新羅初期の７世紀末である。

（２）仏国寺の蓮池[30]

仏国寺は528年に慶州外東面吐含山麓に創建された新羅の代表的な寺院である。『仏国寺古今創記』に「嘉慶三年戊午年に蓮池の蓮の葉を返す」との記録があり、九品蓮池が浄土の象徴である蓮花を飾る皿としての機能を果たしていたという。この九品蓮池は、浄土に往生するものが座った９種類の蓮花台に由来する。

1970年の発掘調査でこの蓮池が検出された。青雲橋と白雲橋の南側の泛影楼付近にあり、東西39.5 m、南北25.5 m の楕円形、深さ２～３m で池の周囲に巨大な石が積み上げられていた。周囲との位置関係から、蓮池が極楽浄土へと進む過程であることが象徴的に表現されているという。さらに、この池は仏、塔、山頂などを水面に映す影池としての機能も果たしていたと推測されている。

（３）清平寺高麗禅園[31]

江原道春城郡清平里慶雲山の麓にある文殊院は、宣宗６年（1089）に清平寺で隠者として新しい生活を始めた李資玄（1061～1125）によって建設された。李資玄は居士仏教を開いた代表的人物であり、智慧を象徴する文殊菩薩に対する信仰が篤く、道家的立場から仏教を受け入れたために山水が秀でた慶雲山に禅苑を造った。

現在の庭園は李資玄の作であるとはいいきれないという説もあるが、この禅苑は渓流沿いにあり、中苑、南苑、北苑に分かれている。面積は４万3,200㎡である。

禅苑の入り口には亀石と九松瀑布があり、中苑に入ると高麗時代の池がある。この池は水が鏡のように澄み、慶雲山の芙蓉峯と見性庵が映るといわれ、名を影池、または南池ともいう。池は南北17m、東西幅は南で８m、北で12m の台形をなしている。この形態は、北に位置する芙蓉峯の岩の形を池に映すのに適し、また池北方の樹石群と池中の三つの石（三神山）を結びつけるために、対岸である北側の辺がより長く造成されている。

影池の北方の地域には、樹石群が造成されており、亀形石組がある。

南苑は、約7,000㎡の広さで、文献に現れる福禧庵址がある。南側に小さな池の跡があり、座禅石、亀形石、渓流に造成された人工瀑布の跡がある。

北苑の入口に清平仙洞（人工石室）があり、李資玄の真筆で右側岸壁に清平仙洞と刻まれている。渓流には５ヵ所の自然の滝がある。そのうちの二つ目の左には畳石で積み上げられた石山がある。長さ5.8 m、高さ3.3 m で、自然石の岩盤の上に９段の石板を積んで造成している。北苑は奥まった閑寂な谷間で、李資玄が主に居住したところである。３ヵ所の禅苑中もっとも規模が大きく、16,000㎡にもなり、清平息庵からは南に延びる慶雲山の尾根筋が見渡せる。

名勝第70号「春川清平寺高麗禅園」に指定されている。

（４）一枝庵[32]

全羅南道海南の頭輪山中腹（大興寺境内）に草衣禅師（張意恂、1786～1866）が19世紀初めに造った茶庭である。韓国では茶は三国時代から流行し始め、継続されてきた。

草衣禅師は『東茶頌』という茶書を著述して韓国の茶道を中興し、茶禅一如を生活化した茶人である。草衣禅師の「頭輪山草庵序」には、蓮池北東に植えられた杜鵑花（さつき）が咲けば、紅色の花が池に映って歓喜に満ちた情景のなかで茶禅が成し遂げられ、月が蓮池に写るときには宇宙の真理が水中に浸って幽玄な雰囲気のなかで茶を飲みながら、茶と禅が一つになる神仙の境地に至るという詩文が書かれている。

一枝庵は茶亭として用いられた面積約18㎡の建物であり、茶泉、上池（6.2 m× 3 m）、下 池（2.6 m×1.5 m）、茶竈（茶を沸かす竈）、石榻（ベッド状の石）、石臼、石槽などが付随する。

第４表　近代に造られた日本風の庭園

名称	所在地	作庭年
旧廣津家	群山市	1925年
海倉酒造場	海南市	1927年
成氏古家	昌寧郡	1929年
李勲東庭園	木浦市	1930年代
大興寺無染池	海南市	1939年
貞蘭閣	釜山市	1943年
海雲台区庁	釜山市	1940年代
建齋古宅（李用琦古宅）	牙山郡	不明
東莱別荘	釜山市	不明

（５）近代の庭園

朝鮮時代が終わりに近づく1860年

代以降、特に日本統治の時代であった1910年から1945年には、韓国の伝統的な様式で造られた著名な庭園はほとんどないようだ。寺院・住宅などで日本風の庭園が造られた事例があり、第４表の庭園が現存する[33]。

３．日本との比較

寺院の庭園と周辺環境　平等院（京都府宇治市）・毛越寺（岩手県西磐井郡平泉町）などの阿弥陀堂の前に園池を掘った浄土式庭園や、大徳寺大仙院（京都府京都市）・龍安寺（京都府京都市）などの禅宗寺院の方丈に面する枯山水など、日本では古くから寺院に庭園が造られ続けており、寺院庭園は日本庭園史の重要な一分野となっている。韓国には前節の事例のように、入口に方池や蓮池が造られ、山岳寺院の境内周辺の林内に庭園が整備された。造園の視点からは山岳寺院の建設において、美しい自然のある場所が選ばれていることも注目される。

日本の禅宗寺院の周辺環境　韓国の山岳寺院の美しい環境をみると、大陸模倣的といわれる日本の中世禅宗寺院における境致が連想される。それは上記のような枯山水を造った禅僧たちの景観の捉え方に関わる概念である[34]。中国南宋の時代に栄えた江南の大禅院は、優れた自然環境のなかにあった[35]。その影響を受けて日本で建立された禅宗寺院では、14世紀から、境内および周囲の優れた自然や建築を境致として選び、佳名をつけ詩を詠み、意味づけした。その対象とされた自然は、山・峰、岩・洞窟、川・渓流・滝、池、井・泉・水、樹木・林などである[36]。鎌倉の禅興寺の塔頭であった明月院には1394年（応永元）頃の姿を描いたものといわれる絵図があり、そのような寺院の美観をうかがうことができる。境内には山、池、廊橋、樹木があって、美しく造景されている。

禅僧の夢窓疎石（1275～1351）が開山となった京都の天龍寺の例を挙げると、夢窓が寺域内外の環境から「亀山十境」を選んでおり、そのうちの一つである「萬松洞」には仙境を詠み、神仙の世界観からその景趣を修飾している。また、夢窓に参禅した春屋妙葩（1312～1388）はこの寺の風景について、『夢想国師年譜』に「此地也。以龜嶺爲主山。以

第９図　大興寺

第10図　仙巌寺門前の渓流と昇仙橋

嵐峰爲按山。小倉擁左。洪川導右。天開圖畫之絶境。雒下無雙之靈場也。」と記した[37]。亀山を主山、嵐山を案山とみて、天開図画の絶境、霊場と評しており、風水地理説を意識した言葉である。同寺の亀頂塔は風水を鎮めるために後方の亀山山頂に建てられたもので、眺望にも使われていた[38]。このように、日本の禅院では外部環境に強い関心が向けられ、神仙思想や風水地理説の概念を踏まえて環境が語られることがあった。

蓮池と茶の庭　両国の寺院には、蓮池と茶の庭の事例が共通してみられる。蓮池は、池に蓮を植えたものであり、池の位置や形状も両国で類似点がある。茶の庭は、日本では16世紀後半から17世紀前半に茶の湯が隆盛して極度に発達し独特の型をもつようになったが、両国とも静かな空間と清らかな水を尊ぶところは変わらない。

Ⅳ．住宅・別墅

1．住宅－主として朝鮮時代－

（1）住宅の構成

都市・集落の多くは風水地理説にもとづいて、山に囲まれた南下がりの地形で河川に臨む土地に建設された[39]。現在、各地の民俗村に伝統的な集落と住宅をみることができる。

野村孝文[40]によれば、一般に朝鮮住宅の庭（マダンと呼ばれる）は上流、中流、庶民住宅、さらに農家までを含めて、日本住宅の庭園に相当するものではなく、主に作業空間や室内空間の延長としての住機能空間である。高級住宅では、主屋棟の区画から離れて庭園区画を造る例がある。

庶民住宅では、主屋と籬の間に造られる庭は、内部空間で果たしえない住居空間を外部空間に拡大した、一種の‘半内部空間’の如きものであり、搗き固めた土間で、芝などを植えることはないという。祝宴をする場合に庭に蓆を敷いたり、穀物を干したり、家事労働がおこなわれる。そして、墻は軒よりも低く、主屋の視点場からは墻外の空間が墻内の空間と視覚的に連続し、外の大自然が同化される[41]。

（2）両班住宅

構成と庭　稲次は朝鮮時代の上流階級である両班の住宅について、敷地を四つの領域に分類している[42]。①主婦・家族の領域、②主人・接客の領域、③使用人の領域、④祖先の領域である。それぞれの領域には、主屋棟、舎廊棟、行廊棟、祀堂棟が建つ。これらは儒教にもとづく習俗が反映されたもので、階級の別、男女の別、上下の別、祖先崇拝の象徴となる家廟の制が基準となっている。南面する斜面上の敷地において、北部には祖先の領域と、主婦・家族の領域に付設される後園があり、中央に主婦・家族および主人・接客の領域、南部の入口付近は使用人の領域となる。

主屋棟・舎廊棟・行廊棟に面する庭は土の平庭である。家事作業や儀式に使われ、果樹

や草花が植えられることがあるが、観賞を主目的としない。後園は生活空間ではあるが、怪石、石蓮池が置かれ、ザクロ・杏・桃・棗などの果樹が植えられることがある[43]。怪石は穴のあいた石など趣のある石を観賞するため、石函と呼ばれる台に縦に据えたものである。後園は敷地の制約から、横長で奥行きは短く、段状となっている場合が多い。住宅に木を植えることについては、当時様々な言い伝えが流布しており、神経が使われていた。例えば『山林経済』には、「屋敷内に杏の木があり、建物の西側に柳があるのは凶、西側に桃があり、北側に李があるのは良くない。」と述べられている[44]。また、儒教の影響を受けて、倹素質朴を尊び、堅実な平民的素朴さ、慇懃さが重んじられたことで、華麗な花木よりは、節操や気概などの象徴性を表す松、竹、梅が植えられた[45]。

墻は土のほか、石、瓦、煉瓦が積まれる。その壁面は装飾されるものが多く、吉祥文字紋様、十長生紋様、動・植物紋様、幾何学紋様、文字紋様などがある[46]。

眺望　主屋棟の中心には大廳（デーチョン）という板間の抹楼（マル）がある。基壇の上に建ち床が高く開放的で、南に向かって外部の自然景観が遠望され、北に向かっては後庭をみることができる[47]。稲次敏郎はこのような「住居内の眺望」を、「作庭されない庭園」として、韓国庭園の存在形式の一つに挙げた[48]。

鄭泰烈らは、慶尚北道の両班の本宅である宗家とそこから離れて建てられた亭の眺望について分析した[49]。宗家は風水地理説でいう明堂の位置に、その村落で最初に居を構えた高位貴族の本宅である。風水では、居住適地の地勢を局と呼んでおり、局がもつ顕著な特徴は主山と案山と呼ばれる二つの山の間に形成される盆地状の地勢である。18の村落に属する19件の宗家と45件の亭を研究対象として分析し、次の結果を導き出した。

・宗家の74％にあたる14件が主山の麓にあり、村落の縁辺に立地する。これは風水思想が入る前に既にあった韓国の居住地の立地理論である背山臨水の基本的原則にかなっている。

・宗家における眺望の範囲は、坐向論に従い視点場である舎廊房（サランパン：主人が主に生活する場）あるいは、大廳（デーチョン）が開いている方向（＝宗家の視軸）を正面とする。

・宗家においては、案山がない例外を除けば、すべての宗家から案山が眺望できる。また、亭が眺望の対象として重視されている。

・案山は宗家の正面方向（宗家の視軸）

第11図　住宅からの眺望景観
（ソウルの韓国家具博物館での再現）

に位置する。すなわち、案山は宗家の視軸を中心とする静視野60°以内におさまっている。9件（53%）は注視野20°に入っている。

方池　両班住居の大門外部周辺、または主人専用の離れである別堂近くに方池が設置された例がある。江原道江陵市所在の船橋荘は地方両班の代表的な住居である。大門の外に蓮池と亭からなる外庭がある。東岸には活来亭が池にせり出して建ち、池内には蓬莱仙山を象った円形の島がある[50]。護岸は切石積みであり、流水樋、四隅の押え石に怪獣の石彫りがつく。これらは王宮の方池の伝統的な様式を継承するものである[51]。

（3）近代の住宅庭園

寺院の章で述べたように、近代に住宅で造られた日本風の庭園がある。第4表に示した通りである。

2．別墅

（1）概観

別墅の起源は、新羅末の文官であった崔致遠（857～？、号は孤雲）が慶尚南道の海印寺に隠棲したことに遡るという。高麗時代には地方官吏出身の士大夫が地方に別墅を造った。光州市郊外の良瓜洞亭や1361年に沈東老が海の近くに建てた海岩亭が知られている。

李氏朝鮮は官僚制中央集権国家であり、両班制によって文班（東人）と武班（西人）の特権身分が官職を独占した。彼らは国教とされた朱子学をはじめとして学問を修め、科挙に合格して官僚となった。しかし、両班の間での激しい党争による盛衰は過酷であり、また、儒教や道教の発展により、自然のなかで隠逸しようとする風潮が高かった。このような別墅は風水地理説に適う土地が選定され、たいていは庭園が造られ、自然環境を基礎として、流れや池が整えられた。日常生活の場である住居から離れて、別墅は徒歩圏に造られ、休息・作詞・吟詠、遊び、舟遊び、酒、研究・読書などの場として利用された[52]。

『最新東洋造景文化史』では、別墅を川・海などと隣接するかどうかで臨水型と内陸型に分類し、さらに渓流が敷地内を通るかどうかに着目して細分している。別墅に建てられた亭は、正面3間、側面2間が基本形であるという。有室型と無室型があり、有室型の部屋の配置は中央、偏心（左または右）、分離（左右の両方）、背面型のいずれの例もある。

渓流のある別墅でも方池などの池が造られることが多く、池への給水は自然の流れのほかに視覚的な趣のために人工的な形状の水路などを設置する場合もある。人生観や道教的な宇宙観にもとづいて別墅内の空間に命名し、それを周辺の岩に漢字で記した岩刻もよくみられる。花階が造られ、怪石が置かれることもあった。

植樹もおこなわれており、故事にまつわる樹木が植えられ、境界や遮蔽のために松や竹が群植された。『軍国歳時記』には、枝垂れ柳が雑鬼を辟邪する力をもつという記録があるため、渓流の縁に植えられた。また、枝垂れ柳は、風に揺れる様子が願いに象徴された

り、女性の姿に喩えられる木であった。

（2）事例

①瀟灑園[53]

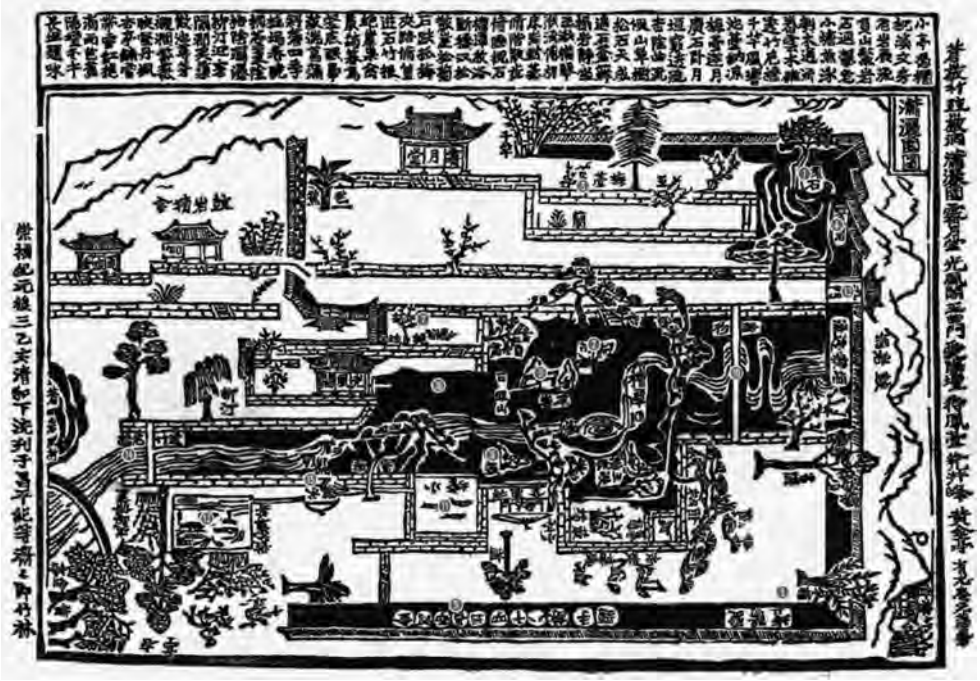
潭陽の壮元峰の谷から流れる渓流の両岸を敷地として、儒学者・政治家の趙光祖（1482～1519）の門下であった梁山甫（1503～1557）が隠居のために造った別墅であり、1530年代には築かれ、1548年までには完成した。別墅は丘陵の南東麓に近い斜面に位置し、面積は約4,000㎡である。幅の狭く傾斜の急な渓流が敷地内の東寄りを北から南へ曲流する。

1672年頃に描かれたという造営時の図が「瀟灑園圖」という、大きさ36 cm×24 cm の木版画として1775年に制作されており、往時の姿を詳しく知ることができる。地割は現状とほぼ同じである。図中には建物や植物などの名称が記入されている。さらに、画面の上部には、梁山甫らと親しく交友した儒学者である金麟厚（1510～1560、号は河西）が詠んだ「瀟灑園四十八詠」という五言絶句がつけられており、この詩も往時の状況を知るための重要な資料である。

渓流の西岸では傾斜地に段々の平場を造り、上方に霽月堂、渓流に接して光風閣を建てた。霽月堂は主人が居所し、本を読む場であり、光風閣からは後述する渓流や対岸の景色をよくみることができる。ともに南東の方角に向けられ、軒をそらせた開放的な建築である。対岸にも待鳳臺の上に小亭が建つ。渓流は幅や高さの変化が激しく、特にこの待鳳臺付近では露出した岩盤上を水が流れ滝となって落ちている。「瀟灑園圖」には「槽潭」「瀑」「廣石」「床岩」「榻岩」という文字が記入されている。そのほかに「石假山」という文字もあるが、これは現存しない。「瀟灑園四十八詠」によって、「槽潭」は水を浴びる場、「廣石」は月見をする場、「床岩」は将棋をする場、「榻岩」は瞑想する場であったことがわかる。

入口は南側にあり、麓から竹林のなかを歩いて入口に至る。入口から渓流の東岸を北に移動すると、5.5 m×4.0 m の下池、その先に2.8 m 四方の上池がある。かつてはこの二つの池の間に水碓の小屋があった。その先の待鳳臺を過ぎると、愛陽壇という平坦地がある。この付近が敷地の北端である。北面の土塀は石積みの柱を支えに渓流をまたいで建てられており、渓流の流れがそのまま敷地内に入ってくるようになっている。

略彴（まるきばし）で渓流を渡って西岸につくと、かつては北の土塀には五曲門という門が建っていた。橋のほぼ正面には、梅臺という名の花階がある。この花階は自然石を積み上げた高さ約１m の２段の擁壁で、背後に土塀が建ち、植栽は疎らである。「瀟灑園圖」に描かれている植栽もやはり多くない。花階前の細長い平坦地を進むと霽月堂前の広場に出る。「瀟灑園圖」には、南を除く三方の境域には塀があり、北東や北西の方角には山々が描かれている。塀は低く抑えられ、別墅内の高所からは外の風景を望むことができ



第12図　瀟灑園圖

第13図　瀟灑園の全景（右上が北）

第14図　瀟灑園の花階

第15図　瀟灑園の斎月堂

第16図　瀟灑園光風閣からの眺望景観

た。霽月堂の南側で塀を隔てた場所には、かつて鼓岩精舎と負暄堂があった。これは梁山甫の子の書斎として建てられたものであり、現在は失われ草地になっている。その背後には住居があった。霽月堂の前から下に降りていくと光風閣があり、その先の透竹危橋という橋を渡ると入口に戻る。園全体において、平坦地の境や建物基壇によって高低差が生じる部分には、自然石を積んだ擁壁と階段が築かれている。

往時の植栽は「瀟灑園圖」と「瀟灑園四十八詠」から知られている。例えば、聖徳の天子が現れる兆しである鳳凰を待つという思いから、待鳳臺の近くに桐と竹が植えられ、また、陶淵明の「桃花源記」から、光風閣の近くに桃塢が設けられたという。桃塢とは桃が植栽された花壇のことである。ともに中国の伝説や文学に因んで植栽が選ばれた例であり、隠逸した文人の趣向が典型的に現れている。

名勝第40号「潭陽瀟灑園」に指定されている。

②環碧堂[54]

光州の環碧堂は、地元の若者を教育することを目的として、朝鮮時代初期の学者である金允悌（1501～1572）によって建てられた。東に小川が流れる低い丘陵の南東向きの斜面に造成された平場の上に建っており、眺望は北東から南東の方向に開けている。近くには渓谷やサルスベリ林があり、金允悌が晩年を過ごした村から約200 m の場所にあった。のちに文臣、詩人として活躍した鄭澈（1536～1593、号は松江）が住む村も近くにあったため、２人が知り合う歴史的な場所となった。位置は光州と潭陽の境に近く、およそ東へ800 m の近所に瀟灑園がある。

名勝第107号「光州環碧堂一円」に指定されている。

③臨対亭[55]

学者の南彦紀（1534～？、号は考盤）が1500年代に造営したといわれるが、19世紀の中頃に閔冑顕（1808～1883）の手に入り、1862年４月に臨対亭が建てられてから、臨対亭の庭と呼ばれるようになった。臨対亭は高台の端に建ち、周辺の景色を俯瞰することができた。亭の近くに小さな方池円島が設けられている。下にも二つの曲池がある。

臨対亭は全羅南道和順郡にあり、名勝第89号「和順臨対亭園林」に指定されている。

④息影亭

息影亭は、1563年に金成遠が義父である林億齢のために建てられた。全羅南道潭陽郡の高台の上にある。当時この地には多くの士大夫が隠棲し、この亭のほかに、梁山甫の瀟灑園、金允悌の環碧亭など多くの亭が建てられ、庭園が造られた。梁山甫の外兄にあたる宋純（1493～1582）が1533年に故郷である潭陽霽月里に建てた俛仰亭が早い例であり、宋純は金成遠、金允悌、林億齢、鄭澈、高敬命、金麟厚など、星山歌壇を形づくっていた人々と深い交誼を重ねていた。

第17図　息影亭からの眺望景観

第18図　息影亭の近景

息影亭の建設時には、金成遠、林億齢、高敬命、鄭澈が息影亭をめぐって二十種ずつの漢詩を賦した[56]。また、鄭澈が彼の代表作である「星山別曲」や「息影亭二十詠」などの詩を残しており、息影亭は文学史の上でも重要な場所となった[57]。「星山別曲」には、隠逸した文人らしい思想・趣味や春夏秋冬の美しい情景が詠まれている。

名勝第57号「潭陽息影亭一円」に指定されている。

⑤草澗亭

醴泉の草澗亭は学者、官僚であった権文海（1534～1591、号は草簡）によって建てられ、ここで彼は朝鮮時代の最初の百科事典となる『大東韻府群玉』を編纂した。前身は精舎であり、風流を楽しむ別荘というよりは講学や著作のための空間であった。その立地は岩盤が露出した渓谷に臨む切り立った岩崖の真上である。権文海の住居からの距離は1.9 kmである。

名勝第51号「醴泉草澗亭園林」に指定されている。

⑥甫吉島の尹善道の園林[58]

尹善道とその別墅　尹善道（1587～1671、号は孤山）は文官にして時調歌人であった。時調とは韓国の代表的な古典詩歌で、短歌形式の定型詩である。1637年に51歳で一旦隠逸し、莞島郡甫吉島に樂書齋・洞天石室・洗然亭を造成し一帯を芙蓉洞と名付けた。

その後、登用、配流、隠逸を繰り返し、1639年に海南蓮洞の水晶洞・聞簫洞、翌1640年に金鎖洞にも別墅を造成した。晩年は浦吉島に居住し、1671年に樂書齋で死去した。その間、1688年に子が曲水堂を造成している。

芙蓉洞一帯（楽書斎・洞天石室・洗然亭・曲水堂）は発掘などの調査ののちに、修復され、名勝第34号「甫吉島尹善道園林」に指定されている。金鎖洞は海南にあり、その居所であった會心堂は人家とは遠く隔てた山上に造営されており、現在は遺跡化している。

尹善道は鄭澈、朴仁老（1561～1642、号は蘆渓）とならぶ朝鮮三大歌人に数えられている。作品は詩文集『孤山遺稿』にまとめられており、代表作の一つであってここに示す

「五友歌」[59]は、金鎖洞で詠われたものである。水・石・松・竹・月の不変性を主題とするもので、尹善道の自然観をうかがうことができる。

내 버디 몃치나ᄒᆞ니 水슈石셕과 松숑竹이라	わが友を数うるに　水に石に松に竹
동산에 ᄃᆞᆯ오르니 긔 더욱 반갑고야	東の山に月昇り　歓びはひとしおなり
두어라 이 다ᄉᆞᆺ밧긔 더ᄒᆞ야 머엇ᄒᆞ리	ああ　この五友あれば　何をか加えん
구룸비치 조타ᄒᆞ나 검기를 ᄌᆞ로ᄒᆞᆫ다	雲の色は美しきに　黒きこと数あり
ᄇᆞ람소ᄅᆡ ᄆᆞᆰ다ᄒᆞ나 그칠적이 하노매라	風の音は清きに　途切ること多し
조코도 그츨뉘업기ᄂᆞᆫ 믈 뿐인가 ᄒᆞ노라	美しくて　とぎれぬものは　水のみ
고즌 므스일로 퓌면서 쉬이디고	花はなぜにか　咲きては易く散り
플은 어이ᄒᆞ야 프르ᄂᆞᆫ듯 누르ᄂᆞ니	草はなぜにか　青きからに黄ばむ
아마도 변티 아닐ᄉᆞᆫ 바희뿐인가 ᄒᆞ노라	しかと　変わらぬものは　岩のみ
더우면 곳퓌고 치우면 닙디거ᄂᆞᆯ	暖かくば花の咲き　寒くば葉の散るを
솔아 너ᄂᆞᆫ 얻디 눈 서리ᄅᆞᆯ 모ᄅᆞᄂᆞᆫ다	松よ汝はなぜ　雪にも霜にも強きか
구쳔의 블희 고ᄃᆞᆫ줄을 글로 ᄒᆞ야 아노라	九泉に　根ざしたるを　以って知るなり
나모도 아닌거시 플도 아닌거시	木にもあらず　草にもあらずして
곳기는 뉘시기며 속은 어이 뷔연ᄂᆞᆫ다	真っ直ぐは誰の為　中はなぜ空か
뎌러코 四ᄉᆞ時시에 프르니 그를 됴하 ᄒᆞ노라	かくて　四時に青く　そを好むなり
자근거시 노피 떠서 만믈을 다 비취니	小なるが　高く浮かび　万物を遍く照らす
밤듕의 光광明명이 너만ᄒᆞ니 또 잇ᄂᆞᆫ냐	夜中の光明は　汝に如くものはなし
보고도 말 아니ᄒᆞ니 내 벋인가 하노라	見るも　黙せるに　わが友となるべし

芙蓉洞の樂書齋・洞天石室・洗然亭　尹善道は隠逸を決意したとき、済州島に向かったが、その途中で甫吉島の景観をみて好感をもった。そして、島の主峰である格紫峯から発する大きな谷に芙蓉洞と名付け、最初の隠逸の地とした。一帯は、楽書斎を中心とした定住空間、自然景観を観賞しながら散策と休息を楽しむ郎吟渓と曲水堂の空間、芙蓉洞全体を見下ろすことのできる洞天石室空間、渓流を活用して人工的な水景を創り出した洗然亭空間に分けることができる。

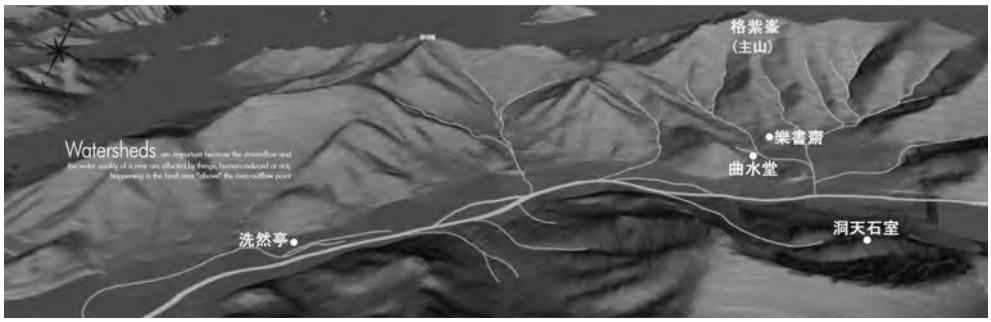
格紫峯の北麓において、小隠屏と名付けられた大岩の下に樂書齋を建て、生活の本拠地とした。この建物は後方に位置する主山の気脈を受ける形になっており、北面する。このような建物配置は方位よりも気脈を受けることを重視する風水論にもとづくものである。楽書齋の立地は、格紫峯から尾根伝いに流れる気を受け止め、その気が止まる場所であり、

「明堂」にあたるとされる。

また、樂書齋の前方で北側にあたる谷と郎吟渓を挟んで、格紫峯と対峙する山を風水上の案山とし、その露岩が岩山を呈したところに方一間の小屋を建て、仙人の住まいとして「洞天石室」と命名した。洞天とは神仙が住むところで、尹善道はここを「芙蓉洞第一之勝」とした。洞天石室は楽書斎から真北に約1km離れた案山の中腹で、海抜約100mの所にあり、面積は約2,300㎡である。洞天石室からの眺望景観は芙蓉洞のなかでもっとも優れており、格紫峯をはじめ、その山裾に位置する樂書斎の一角を望むことができ、また眼下には西から東へ流れ下る郎吟渓を見下ろすことができる。

この洞天石室で、尹善道は岩盤の上に1間の石室（石函）を築造し、特別な水の空間を造った。『甫吉島識』によると、石門、石梯（石段階段）、石欄、石井、石泉、石橋、石潭などがあり、これらはみな手をくわえず、自然の形を活かして名前を付けたものだという。石室の位置はもっとも高いところにあり、石室の西には岩台と石壁の間に石潭があり、睡蓮が咲いていた。

さらに、芙蓉洞の入口に亭を建て洗然亭と名付けた。亭内からは四方の眺望を楽しむことができる。東南側の池は郎吟渓から分水した流れを洗然亭の北東に築いた堰によって堰き止めたもので、奥行きは40mほどあり、大小の自然石が自然な状態で転がっている。



第19図　尹善道園林全体の俯瞰

第20図　尹善道園林の樂書斎（亀石の発掘）

第21図　尹善道園林の洗然亭

第22図　尹善道園林の洞天石室

第23図　尹善道園林の曲水堂

また洗然亭のほぼ東には扁平な石の乱積みを護岸とした円島がある。一方、北西側の池は直線的な護岸からなる矩形の池で、その池のほぼ中央には上述した円島と類似した石積みの方島がみられる。『甫吉島識』には、東台と西台を造成し、その台の上や玉簫岩の上で舞を舞ったり、池に舟を浮かべたり、亭で管弦楽を演奏したことが記録されている。

朝鮮時代における隠逸は時の政治から離れるためのものであり、実社会から離れるものではなかった。樂書齋の東側近くには教育機関としての書室や静成菴があった。また、洗然亭の堰は亭を取り囲む園池を形づくるとともに、その下手に位置する水田用水の貯溜と水量調節をはかるものであった。

曲水堂　1653年、尹道善はそれまでの樂書斎にくわえて新たな住まいとして天悶堂を築造し、1688年にはその近くに曲水堂が建てられた。1990年代の金眞成らの調査前には樹木に覆われていたが、その後、発掘調査を経て、建物復元を含む整備がおこなわれた。曲水堂の庭園遺構は発掘結果によると、曲水堂、書斎、亭など3ヵ所の建物跡、上池と下池の2ヵ所の池、渓潭、橋、滝、方台などの要素で構成されている。

上池の後面にあたる池の東側に小さい段をいくつか造り、その上に花を植え怪石を置き、また池の東南に高い方台を造り、その上に石を積んで仮山を造ったという記録がある。上池は、象徴的な意味のほかに眺望と観賞の対象となる水景要素であり、上池の東の方台に穴を開け石筒を入れておき、隠筒で水を導入し穴を通して池に水を流し込んだようである。

池や渓潭、川などは護岸が直線的であり、自然のなかで直線が強調された単純明快な水景をみせている。この曲水堂での作庭は渓流を堰き止め水源を確保し、景としては静的なものとして、渓流は堰堤で流れを防ぐことで水面と水深を確保し、多様な水の景観を創出した。渓流に架けられた橋を利用して、二つの方池が連なる形の庭園となっている。

⑦石門林泉庭園（瑞石池）[60]

学者であった鄭榮邦（1577～1650、号は石門）が官職の道を固辞し、故郷近郊において、10余年にわたり周囲の環境を調査した後に敷地を定め、築いたものである。慶尚北道英陽郡立岩面蓮塘里にある。

中心景観をなしている瑞石池は主一齋の前にあり、南北の長さが11.5 m、東西が13.4 mの台型の蓮池である。護岸は高さ1.3～1.5 mであり、板石状の自然石を７、８段積み上げる。水深70 cmの池の水は底から湧く地下水で充当されているが、一部は紫陽山側に出る泉の水を引き、主一齋の東の幅30 cmほどの水渠を通じて蓮池に流れ込むようにしている。

蓮池のなかには60余個の灰白色の石がある。これらは池を掘ったときに出た石英岩をそのまま景石に活用したもので、石群の周囲には蓮が植えられている。鄭榮邦はこれらの石の形に従って一つずつその名前を付け、敬亭雑詠32節に19個の石の名前が記録されている。これらの名前は神仙思想に由来するものが多く、そのほか、花や蝶、魚、龍、星の名などが付けられており、池のなかに小宇宙を造ろうとしたことがわかる。

池の西に建つ敬亭は正面４間、側面２間の建物で、広い板間の両側に部屋があり、ここからは周囲の山水景観を眺望することができる。一次的には蓮池の瑞石群と蓮華を俯借でき、東南の低い塀越しに遺種亭と周辺の松林を隣借（塀の外の近隣の景観を眺める）でき、遠くに位置する蘿月巖、紫錦屏、燧燧山などの山景を自然な視野で仰借できるように造られている。周辺の景観を展望できるように東側の庭は塀を65 cmと低く造っている。

⑧鳴玉軒[61]

潭陽郡古西面後山里にあり、蔵渓亭の名でも知られる。かつて呉希道が住んでいた場所で、彼の息子である呉以井（1619～1655）が1652年に、ここに隠逸しながら自然景観が優れた丘の上に庭園建築を建て、その前後に池を造り、赤松とサルスベリを植え、造営した庭園である。住居は丘を一つ越える、500 mほど離れたところにある。

面積は3,300 ㎡であり上・下の２段に分かれ、それぞれに方池円島がある。1979年に発掘された上部の後庭の池の大きさは14 m × 8 mである。すぐ下には鳴玉軒が建ち、そこからは下の池を見渡すことができる。正面３間、側面２間の入母屋造りの建物である。後庭の斜面を流下する水は自然の巨岩を走り、前庭の池では一枚岩をすべりおちる。前庭の池は1,600 ㎡で全庭の約半ばを占める。池畔には47本のサルスベリの老樹がある。

第24図　鳴玉軒園林の下池

第25図　鳴玉軒園林の渓流

名勝第58号「潭陽鳴玉軒園林」に指定されている。

⑨巖棲斎

巖棲斎は、朝鮮中期の権力者であった宋時烈（1607～1689）が隠逸した場所で、中国の武夷九曲に倣い、忠清北道槐山郡青川面華陽洞の景勝地のなかから９ヵ所を選び、華陽洞九曲と呼んだ。忠清北道槐山郡青川面華陽里から松面里まで、華陽川の渓谷沿い3.9 kmに及ぶ広さである。

ここには巖棲斎をはじめ、住居であった草堂跡、書院跡など宋時烈に関連した遺跡が多くある。巖棲斎は華陽洞九曲の第４曲である金沙潭に登場する。金沙潭は華陽洞九曲のなかで景色がもっとも優れた場所で、澄んだ水の底の砂が金沙のようだという意味で、その名が付けられた。水辺には大きな岩が点々とある。巖棲斎は盤石の上に松の木に囲まれて建つ。屋根は八角形で、２間が部屋、１間が板間である。川向こうの草堂との間を船で行き来したという。

⑩茶山草堂[62]

実学者の丁若鏞（1762～1836、号は茶山）が万徳寺西方にある尹博処士の山亭があった茶山に居を移し、1808年から1826年に配流生活をしたところである。築造時期は1808年で、全羅南道康津郡道岩面に位置する。丁若鏞は哲学者、植物学者、科学者であり、ここで数々の名著を執筆した。

正面５間、側面２間の規模の茶山草堂の左右には東庵と西庵があったといい、康津湾の海を眺望できた。草堂の東に５ｍ×10ｍの方池がある。池のなかには自然石を積んで造った円島があり、島の上に石を配して三峰を造っている。護岸は平たい自然石である。池の後方の丘の上の泉水を木樋で導いて池に飛泉を象っている。草堂と蓮池の後方の傾斜面には1.2～1.6ｍの幅で５～６段の花階を造成しており、サルスベリなどの雑木林となっている。草堂の前には1.5ｍ×1.1ｍ×0.36ｍの平石が置かれており、茶山ではこの石の上で茶を煎じたことから、茶竈石と呼ばれた。草堂の西北の丘の下には澄んだ茶泉が湧き出ている。

⑪城楽園[63]

城楽園はソウルの北漢山にある。第25代国王哲宗（在位；1849～1863）の治世中に、大臣を務めた沈相応の別荘であった。その後、第26代国王（在位；1863～1897）・大韓帝国初代皇帝（在位；1897～1863）高宗（1852～1907）の五男である義親王（1877～1955）も居住した。

城楽園は北漢山の麓にあり、背景に狗蹲峰がそびえ、左に青龍、右に白虎の二つの山脈に囲まれている。後方の駱山が主峰で、園がある場所は穴となっている。自然の地形をそのまま利用し、前庭、外庭、中庭という三つの部分で構成される。

第26図　城楽園の前庭

第27図　城楽園の影碧池

前庭は園内を流れる二つの渓流が合流する地点にあり、「双流洞天」という文字が岸壁に刻まれている。この前庭には龍頭仮山と名付けられた人工的な山があり、樹齢200～300年の樹木が茂っている。中庭には、流れの途中で自然の岩盤に囲まれて池状になった「影碧池」がある。この池の上流の岩盤には水路が掘られ、水流が滝となって池に落ちるようになっている。岩盤には実学者・書家として知られる金正喜（1786～1856）による「張氷家完堂」（つららのある家）などの文字が刻まれている。さらに上部には外庭があり、渓流が流れ込む池と現代に建てられた松石亭という楼閣がある。

名勝第35号に指定されており、現在復元整備事業が進められている。

（3）日本との比較

自然に手をくわえないという思想　韓国の歴史的な庭園の特徴について、これまでの日本人研究者の言葉をみると、岡崎文彬は「韓国では造園ではなく、もっぱら造景の文字を用いるが、実態に照らせば、その用語が妥当なことがわかる」[64]と述べ、小口基實は「日本庭園の場合、外部の景観は、借景ということでしか、空間利用されないのが通常である。しかし韓国の庭苑は、まさに字の通り苑ということで、庭と外の苑とが常にかけ離れず連続して大自然のなかに拡がり、消えてゆくといった修景のあり方で、見方によれば日本庭園の場合とまったく正反対のような気もする。」と考えている[65]。稲次敏郎は建築研究の立場から、住居内について「作庭されない庭園」と象徴的に表現した[66]。

尹張燮によると、韓国では「庭園は、より自然を生かすことに重点を置き、人の手を加えないようにして」おり、風水地理説にもとづき、脊山臨水する明堂を探して敷地を定め、周囲の環境に調和するように自然美を十分に生かして造られているという[67]。以上の言葉や事例から、韓国の住宅では、敷地外に存在する環境が広い範囲で常に意識され、自然を視覚のみでなく体感し、そのなかに身を置くことを目的としていると考えられる。人々の関心が敷地外の環境に向いている割合が大きく、自然環境と自己の一体化という言葉がしばしば使われる。

庭園要素の人工的な形状　上述のように、韓国では自然を生かすことに重点を置き、人の手をくわえないようにしているといわれるが、庭園に取り込まれた人工的な要素は多い。韓国の住宅では、人工的な形状をした方池のほか、石函、花階などが敷地内に設けられた。

このことに関連して稲次は、「日本では池と庭園を一体化する池畔構成であるが、韓国のそれは直線的構成と切石積護岸によって、人と池面の間に断絶感をつくり出している。」と指摘し、「象徴としての庭園」「伝承様式の『方池』」と表現した[68]。さらにいえば、日本では庭園内部の全面において、連続的で一体的な景色を整えることが多い。それは自然な印象を与える曲線を基本とすることからもたらされている。これに対して、韓国の方池は周囲と切り離され単独で存在することがあり、また、その形は記号化ともいえるほど簡単なものに定型化している。

別墅をみると、例えば瀟灑園では敷地の広範囲を造成して平場を造り、段差を直線的な石積みで処理している。また、洗然亭では渓谷と池の護岸を垂直に積んでいる。このように、日本と比較すると、韓国では庭園を整備し個々の要素を付加する際にそれらを整形的な形状とする傾向がみられる。さらにいえば、そのような場合には、庭園の各要素の配置、形状・意匠は建築と共通性をもつものと考えられる。例えば、方池や花階の配置は自ずと周囲の建築と垂直・水平に方向をあわせて整えられ、方池の護岸が建築の基壇外装と共通の形状・意匠で構築されたり、獣頭の装飾などが施されることがある。

庭園に込められた思想　朝鮮時代の方池円島は、神仙思想を基盤にし、陰陽五行説の影響を受けたものといわれる。方池は四角の地を、円島は円い天を意味し、また、陰陽の結合によって子孫の繁栄を祈る意味を含むとされる[69]。陰陽説は、宇宙の森羅万象すべて陰陽の相対するものからなるとする古代中国の宇宙観であり、五行説は木火土金水の五要素を五行といって五行をもととして宇宙・万物などを説明する思想である[70]。

前章で挙げた例のなかでは、瑞石池は宇宙を表現したものである。尹善道の庭園では、風水地理説や「五友歌」など、作庭に思想が込められており、その庭園を理解するためには、思想的な世界観を理解する必要がある。中国から伝わった神仙思想をもとにして、池に神仙島を造ることは日韓ともにみられる。象徴したり見立てたりすることは東アジア共通の文化といえる。

作庭の精神について、日本史学者の芳賀幸四郎は、平安時代の貴族住宅の寝殿造と室町時代の禅宗寺院の庭園とを比較して、前者の庭園は「その様式において自然を模倣した前栽様式であり、その芸術意志は浄土教的美的世界観に涵されている」のに対し、後者は「象徴的様式の仮山であり、その芸術意志は禅の唯心的世界観にねざすものであった」と論じている[71]。また、造園学者の田中正大も同じようにこれらを対比し、寝殿造りの庭における作者は「自然を謙虚に受け入れて、そのなかにはいりこむ」姿勢があるのに対し、

西芳寺の枯山水や天竜寺の石組では「作者自身の心の中の自然を表現しようとするところに、質的な相違がみられる」と述べた[72]。この２人の言葉の通り、日本には、そのままの自然を尊重する作庭と、思想や概念を象徴的に表現する作庭がある。このことは韓国における作庭にもうかがうことができ、この二つを念頭に置き、庭をみることで、理解を深めることができると考えられる。両国の庭園の思想や概念をさらに理解、解明していくことが今後の課題である。

Ⅴ．楼・亭・台

１．概観

（１）種類と性質

韓国の庭園や風景観賞と関わりの深いものに、開放的に造られた楼・亭・台がある。これらは韓国の庭園や景勝地における眺望行為にとって、非常に重要な役割を果たしているものであり、この章では、その特質と代表的な事例について述べる。はじめに、日本で楼・亭・台などの字がもつ意味を確認しておくと、『学研漢和大辞典』では次のように説明されている[73]。楼は「①たかどの 二階以上の高い建物。②高くて大きな建造物。③建物の二階より上。また、その各階。④やぐら 物見やぐら」。亭は「①地上にすっくとたった建物。また、物見やぐら。また、庭の中の休憩所。あずまや。（以下省略）」。台は「一〔臺〕うてな　高い土台や物を載せる台。また、見晴らしのきく高い台。（以下省略）」。韓国での用例もこの内容で矛盾なく理解できると考えられる。なお、台は場所を示すもので必ずしも建物をともなわない。

韓国における台に関する最初の記録は、『三国史記』にある高句麗の東明王の代（紀元前37～19）に「鸞集於王台（鸞が王台に集まった）」というものである。亭に関するもっとも古い記録は、新羅の炤知王（？～500）が行幸したという書出池の天泉亭であり、その後、真平王（？～632）が孤石亭で遊賞したという記録もある。楼については、蓋鹵王代（455～475年）に、宮室に豪華な楼閣、台榭を建てたという記録や、百済の武王が、636年に望海楼で臣下たちとともに宴会を開いたという記録がある。統一新羅時代にはこのような遊興のための楼亭建築のほかに、山地伽藍における楼形式の門という後の特徴的な形式の建築の端緒となるような例が現れていたという。また、自然のなかに建つ楼亭、宮殿の楼亭のほかに、軍事目的の楼亭もあった。高麗時代には増加し、朝鮮時代末期に最盛期を迎えたという[74]。楼は政治、行事、宴会をする公的な空間として、亭は遊観を楽しむ私的な空間として発達した[75]。

朝鮮時代の書院や客舎が景勝地に立地した場合、優れた眺望地点に楼が建てられ、高所から眼下に流れる河川、前方にそびえ立つ山々を眺望の対象とする例がよくみられる。こ

のほかに、庭園には池や流れに臨んで楼亭が建てられることが多く、そのなかには庭園の外を望むことのできるものもある。例えば、公的な饗宴に用いられた景福宮の慶会楼からは宮殿外の山並みを臨むことができる。また、先述したように瀟灑園・鳴玉軒などの別墅の庭園には、通例では園内外を見渡すことのできる開放的な建築がある。

（2）分布

『最新東洋造景文化史』によれば、韓国の楼・亭からの眺めは平均8～10 kmである。1530年代に編纂された『新増東国輿地勝覧』に記録されている楼・亭・台を行政区域別に集計し分布した結果、楼閣が317ヵ所、亭が237ヵ所、台が110ヵ所である。

また、朝鮮時代の前期から後期における楼・亭・台の変化について、前期（1530年）は『新増東国輿地勝覧』を、後期（1871～1899年）は邑誌をもとにしておこなわれた調査結果によると、楼閣の数は317ヵ所から715ヵ所に増えた。また、亭は237ヵ所から1,168ヵ所へと5倍ほどに増えた。亭の構成比率には大きな変化はないが、全体的な数はもっとも多くなっている。このような変化の原因は、儒教が漢陽中心から地方中心へと変化したためであり、地方の儒教文化が形成されたことによるという。

関東八景と関西八景は代表的な名勝八景である。16景のうち、亭が7ヵ所、楼が5ヵ所、台が2ヵ所にある。

（3）楼・亭における景観の分析の例

『最新東洋造景文化史』と安啓福の論文には、楼亭で使われるもっとも基本的な景観処理技法として「虚」の概念が紹介されている。それは、憑虚楼という楼について孫舜孝が記したものであり、「楼虚則能納萬景　心虚則能容衆善（仕切りの無い楼は一万通りもの景観を取り込むことができる。心を無にすれば良いものがみえてくる）」というものである。楼亭は虚であるべきであり、その場合は景観を楼亭の一点に集めたり（聚景）、楼亭から多くの景観をみられるようにしたり（多景）、楼亭の周りを自然景観で囲んだり（環景）、自然景観を楼亭のなかに取り入れたりすることが可能になるという。

先述した鄭泰裂らによる、慶尚北道の宗家とそこから離れて建てられた亭の眺望に関する分析では、亭について次のことが指摘されている[76]。

- 18村のうちの14村が周縁辺型の亭をもち、また、全45件の亭のうちの31件が周縁辺型である。
- 全45件の亭のうち、宗家から亭までの最大の直線距離は950 mの亭であり、最小の直線距離は20 mの亭である。
- 宗家からみえる亭26件についてみると、22件は宗家の視軸を中心とする静視野の外にある。これらは案山が宗家の視軸に積極的にからむ傾向が強いことと比べて対照的である。ただし、良洞里と金渓里を除けば、静視野の外にあるが視認可能な亭は、一宗

家につき１件以上はある。亭はそれ自体が視点場であるとともに、宗家における眺望の「控えめな」点景をなしうると考えられる。

２．事例

竹西楼[77]　三陟の竹西楼は高麗時代の創建と伝えられ、三陟邑西の五十川という渓流を見下ろす絶壁の上に建っている。７間×２間の入母屋屋根の建物で、現在の建物は太宗３年（1403）に再建されたと伝えられている。

五十川は東海岸の海に注ぐ最長の河川であり、海に到達するまでに50回曲がることから、その名がついたという。峡谷沿いの岩崖は石灰岩である。

竹西楼は関東八景として名高い江原道の八つの景勝地のうちの一つである。文臣にして詩人の鄭澈は『関東別曲』に竹西楼を詠った。鄭澈は江原道で関東八景の美を『関東別曲』に、国王に対する忠誠心を『思美人曲』に詠み、朝鮮初期に生じた詩歌の一形式である歌辞を大成した第一人者と評価されている。

名勝28号「三陟竹西楼および五十川」に指定されている。

広寒楼[78]　広寒楼は小白山脈の高原地帯に開けた盆地である南原の市街地に建ち、18世紀に創作された小説『春香伝』の舞台として有名な楼建築である。楼から南方向に、現状では数百ｍ離れて蓼川が北東から南西へ流れ、その奥には緑の丘陵が続いている。楼の前面には三神仙島が配され、銀河（天の川）にも見立てられた東西220ｍ×南北90ｍほどの園池が造られている。

太宗時代に不興を蒙った黄喜（1363～1452）が、南原に隠遁して1418～1422年に広通楼を設け周辺を整備したのが起源であり、1434年には府使閔汝恭が改築し、1444年に広寒楼と改称された。1461年に郡長官の張義國が楼を修復し、川から水を引いて三神山と銀河を象徴する池を造った。

ほぼ現状の地割となったのは、1582年に鄭澈が全羅道観察使（知事）として赴任したときである。池内に蓬莱・方丈・瀛洲島を造り、蓬莱島に百日紅を、方丈島に緑竹を植え、瀛洲島には瀛洲閣を建設し、烏鵲橋を架けた。この橋はおよそ長さ55ｍ・幅2.5ｍの直線

第28図　広寒楼と池北部

第29図　広寒楼からみた池

的な石堤状で、四つのアーチをもつ美しい平橋である。楼からみると右手に烏鵲橋、中央に蓬萊・方丈島、左手に瀛洲島が配されている。池の岸には亀を象った石が置かれている。

このような「天の川を象徴する湖（銀河）」を造った鄭澈は次のように詠った[79]。

清風明月

恢拓銀河弄明月　　銀河（池）を大きく広げ明月と遊び
栽培塢竹挹清風　　塢（どて）の上に竹を植え清風を迎えいれる
一年南國巡宣化　　一年間南国の観察使を勤めしとき
只在清風明月中　　ただ清風明月のなかにいたり

1639年には申鑑が広寒楼を再建し、1795年には李万吉が瀛洲閣を重修した。現在の楼は仁祖16年（1638）に再建されたもので、５間×４間、入母屋屋根、全高約12 m、床の高さは地上から約3.6 m である。柱間にはすべて四分閤門（四分割された門扉）が付き、欄干が巡らされている。

名勝33号「広寒楼苑」に指定されている。

書院　書院とは16世紀半ば頃から下野した儒学者たちが地方に隠居して教育をおこなった施設である。儒学では教育を重視するため、朝鮮時代は教育が振興され、人文教育と職業技術教育が発展し、人文教育機関としてすべての郡県に郷校が設置され、良人身分の優秀な男子が入学した。郷校と、漢城の４ヵ所に設置された学校である部学を出ると、科挙を受けて官吏となるか、または、最高学府である成均館に進学した。成均館で学び文科の試験を受け合格すると官職が授与された。高麗末期から地方儒学者たちは個人財産を投じ私立学校として、マウル単位の書斎あるいは書堂を設立しており、16世紀になるとこのような伝統を継承し、また、儒学者たちを祭る祠堂の機能をも統合して、書院が設立され、地方教育の中心機関として確立した。

屏山書院（慶尚北道安東市）には正面７間、側面２間の高床で四方を吹き放しとする床板張りの晩対楼がある。前方には洛東江が流れ、対岸には屏風にも喩えられる姿で屹立する屏山が眺望できる。開放的な楼建築に座して見渡す山水の風景は格別なものである。晩対楼の近くには小さな方池円島がある。光影池という名であり、蓮が植えられ、学問に精進するという意味が込められている。

客舎　客舎は地方官衙の一種である。王を象徴する殿牌と宮闕を象徴する闕牌を安置し、王のいる都から遠く離れた地方で王の施策を忠実に実行していることを象徴する役割をもっており、外国の使臣や中央から派遣されてきた官吏たちをもてなす場であり、宿所として使われた。

客舎に付属した楼亭である忠清北道清風の寒碧楼は漢江上流の流れを見下ろす高台に建っている。仁祖12年（1634）の造営と伝える。密陽の嶺南楼も密陽客舎に付属する楼亭

第30図　屏山書院晩対楼からの眺望景観

第31図　屏山書院立教堂からみた晩対楼

第32図　屏山書院の光影池

で、密陽江を望む絶壁の上の景勝地に位置している。平安南道の成川客舎には、川に臨む長大な降仙楼、蓬莱閣、十二楼、留仙観・通仙観があった[80]。

捜勝台と安義三洞[81]　慶尚南道居昌郡にある捜勝台は渓流のなかにある巨大な花崗岩の岩である。この岩には非常に多くの文人が訪れ、いたるところにその名前や詩句などの文字が刻まれている。捜勝台のある猿鶴洞の近くには花林洞と尋眞洞があって、この三つは渓谷の景勝地として知られ、16世紀中頃から安義三洞と呼ばれた。

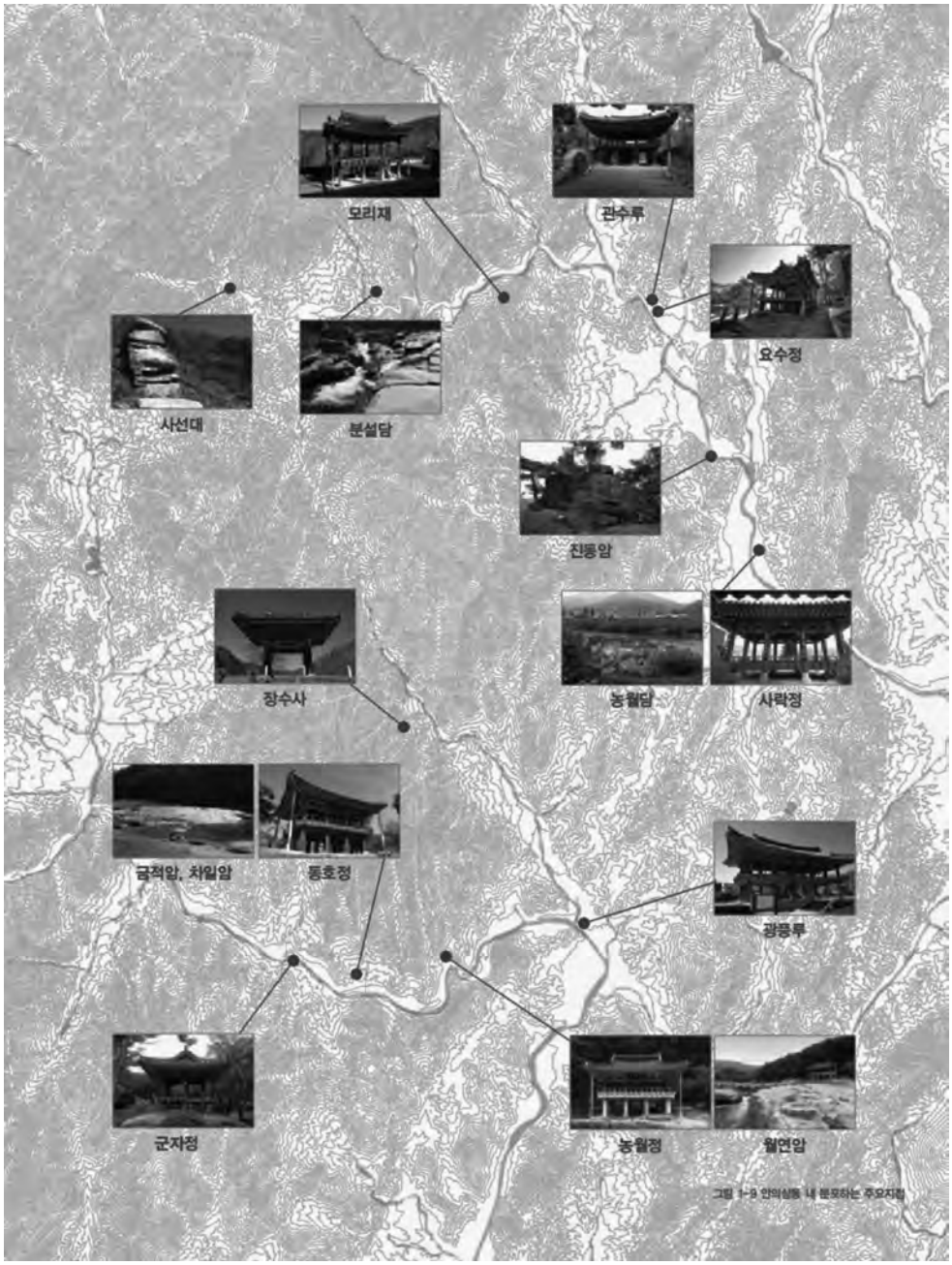
朝鮮時代にはこの安義三洞に数多くの楼・亭・台があり、儒学者たちが遊覧に訪れていた。その様子が『遅菴文集』に収録された李東沆（1736～1804）の「方丈遊録」、『淵齋集』に収録された宋秉璿（1836～1905）の「遊安陰山水記」に記録されている。李東沆は1790年（正祖14）に知人と智異山遊覧をおこない、７日間かけて安義三洞一帯を遊覧し、合計21ヵ所を訪れた。宋秉璿らは、1899年にそれぞれの洞を３日間にわたって遊覧し、15ヵ所に訪れた。このうち現存するものは13ヵ所ある。これらの遊覧では、景観を楽しむことのほかに、過去の賢人の遊覧を踏襲したり、講学または議論をおこなうことも目的とされていた。

安義三洞のなかから、次の４件が名勝に指定されている。居昌捜勝台（第53号）、咸陽

尋真洞龍湫瀑布（第85号）、咸陽花林洞居然亭一円（第86号）、居昌龍岩亭一円（第88号）。

3．日本との比較

眺望行為と隠者　韓国においては自然の景勝地に眺望のための開放的な建築が数多く建てられ継承されてきたのに対し、日本では自然のなかよりも、庭園、住宅や寺院の敷地のな



第33図　安義三洞の主な楼・亭・台

第34図　猿鶴洞の捜勝台

第35図　捜勝台の岩刻文字

第36図　花林洞の居然亭

第37図　花林洞の弄月亭

第38図　尋真洞の龍湫瀑布

かから眺望をおこなった事例が多い[82]。また、ともに支配者層による事例が多くみられることは共通するが、韓国では隠逸した知識人が深く関わっていることが特徴的である。

『最新東洋造景文化史』では、その特徴として、社会改革への責任感、儒教（文学）、自然との一体化（同一化）を挙げている。中国では王朝の交代が頻繁にあり政治が不安定な時期には、知識人が自身の生命の安全を保つために政治の社会を逃れて隠逸することが珍しくなかった。それは、絶えず「仕官」を意識しつつおこなわれ、自然のなかに老荘のめざす「真」があると認識し、「美」があるという自然観がもたれていた[83]。また、世に反してばかりはおらず、地方の子弟のため講学をつとめる者も少なくなかった[84]。このようなことは上述した韓国における隠逸の例と類似のものといえる[85]。

日本の事例　朝鮮時代と同時期の日本の代表的な隠者またはその精神をもった者には、仏道修行者以外では、脱俗して文芸に打ち込んだ連歌師、茶人、俳人などがいたが[86]、彼ら

の経歴や活動は、朝鮮王朝で政治的に隠逸した上層階級とは異なるものであった。近世の日本では、科挙で選ばれた士大夫階級は存在せず、庭園を築造できるほどの財力をもちながら山野に生活することが可能であった者は限られており、そのような庭園の現存例は少ない。武将として活躍した後に隠棲して漢詩人・書家となった石川丈山（1583～1672）が住んだ詩仙堂（京都府京都市）、水戸藩主であった徳川光圀（1628～1701）が隠居した西山荘（茨城県常陸太田市）などの庭園がのこっている。

自然のなかにおける眺望行為では、14世紀の夢窓疎石の事例がよく知られている。禅僧の夢想は日本各地で隠棲修業し、寺院に近い山中において、山野、河川、海洋などの種々の景観を静かに見渡せる場所に庵や亭を建て、座禅をした[87]。しかし、韓国のように眺望のための建築を自然のなかに建てることは、その後も日本では盛行しなかったようである。

近世の日本における亭や高所からの眺望行為については、庭園をはじめ、住宅、寺院、飲食店など、多数の例が文献や絵図によって知られている。儒学者・漢詩人・歴史家であった頼山陽（1780～1832）の書斎「山紫水明処」（京都府京都市）は眺望に優れた住宅の現存例である。このほかにも、儒学者・漢詩人の広瀬淡窓（1782～1856）が私塾の咸宜園（大分県日田市）に建てた「遠思楼」などのように、書斎が高層に設けられることもあった。このような文人の住宅などは韓国の別墅や楼・亭でおこなわれたような、学問、詩詠、文人どうしの交流などの文化的な活動の場となっていた。韓国との比較研究のために、彼らの活動や自然観を分析することが今後の課題である。

韓国の風土　最後に、韓国で楼・亭・台が発達した原因について気候・気象・地勢などの自然環境にも着目したい。『韓国社会の歴史』によれば、韓国は山地が国土の約80％を占めているが、その半分ほどは200～500m 以下の丘陵地であり、周辺には清流の流れる渓谷が発達し、快適な居住環境を提供している。隣接する中国や日本に比べると、韓国では自然災害が少なく、中国では黄河の氾濫と春季の黄砂が人々に大きな苦痛を与え、日本では夏季の台風と予期不能の地震が大きな被害を与えてきたという。また、小口は、夢窓疎石を例外として日本に自然のなかの亭が盛行しなかったことに関連して、台風、地震、雨などの多いことを指摘した[88]。このように、景勝地が多く自然災害が少ないという韓国の風土が、楼・亭・台の文化の土台となったと考えられる。

謝　辞　本研究の初期の段階において、藤井英二郎氏（千葉大学教授）および金眞成氏に韓国の庭園についてご教示いただいた。ここに記して感謝の意を表したい。また、本研究を進めるにあたり、韓国語の書籍、資料などを金年泉氏に翻訳していただいた。厚く御礼申し上げます。

註

1 Kang, In-Ae. ‘A Study on the Characteristics of Resource and Application Indicators in Korean Scenic Sites’, “International Symposium on the Application Strategy of Scenic Site for Expand the Right to Enjoy Culture” National Research Institute of Cultural Heritage, 2015 をもとに作成した。
2 岡崎文彬『世界の造園Ⅱ』同朋舎出版、1982年。
3 李樹華「朝鮮盆栽・盆石の確立における中国の影響」『ランドスケープ研究』62（５）、1999年。
4 朴珖貞「韓日古代苑池の変化からみた九黄洞苑池の性格研究」『日韓文化財論集Ⅰ』奈良文化財研究所学報第77冊、奈良文化財研究所・大韓民国国立文化財研究所、2008年、pp.99－138。
5 佐藤興治「前期の都城」『古代日本と朝鮮の都城』ミネルヴァ書房、2007年、pp.272－294。
6 蔡熙國『大城山一帯の高句麗遺蹟に關する研究』（遺蹟發掘報告９集）社會科學院出版社、1964年。
7 千田剛道『高句麗都城の考古学的研究』北九州中国書店、2015年。
8 田中俊明「高句麗の平壌遷都」『朝鮮学報』190輯、2004年、pp.21-60。
9 朴淳発「高句麗の都城と墓制」『韓国古代史探究』12、角国古代史探究学会、2012年。
10 佐藤興治「王城」『古代日本と朝鮮の都城』ミネルヴァ書房、2007年、pp.336－360。
11 申鍾國（武末純一訳）「泗沘都城発掘調査の成果と意義」『福岡大学人文論叢』39（１）、2007年、pp.205－238。
12 佐藤興治「王京」『古代日本と朝鮮の都城』ミネルヴァ書房、2007年、pp.396－416。
13 豊島悠果『高麗王朝の儀礼と中国』汲古書院、2017年。
14 朴晟鎮「開城高麗宮の研究現状と最新研究成果」『国際公開研究会「東アジア都城比較の試み」発表論文報告集』東アジア比較都城史研究会、2013年、pp.91－107。
15 朴晟鎮「開城高麗宮の研究現状と最新研究成果」（前掲註14）。
16 『景福宮』現地案内小冊子 日本語版、2008。武井 一『ソウルの王宮めぐり』桐書房、2000年。
17 内田和伸「日韓宮殿の設計思想について」『日韓文化財論集Ⅰ』奈良文化財研究所学報第77冊、奈良文化財研究所・大韓民国国立文化財研究所、2008年、pp.1－51。
18 『勤政殿実測調査報告書』韓国文化財庁、2000年、pp.127－128。
19 渡辺信一郎「六朝隋唐期の太極殿とその構造」『都城制研究（２）宮中枢部の形成と展開－大極殿の成立をめぐって－』奈良女子大学21世紀 COE プログラム報告集 Vol.23、奈良女子大学、2009年、pp.73－89。
20 武井 一『ソウルの王宮めぐり－朝鮮王朝の500年を歩く』（前掲註16）、p.169。
21 妹尾達彦『長安の都市計画』講談社選書メチエ、2001年。内田和伸『平城宮大極殿院の設計思想』吉川弘文館、2011年。于倬雲（編）『紫禁城宮殿』（田中淡、末房由美子訳）講談社、1984年。
22 前掲註20、p.234。
23 『文化財解説士といっしょに昌徳宮』カルチャーブックス、2012年。『昌徳宮』現地案内小冊子 日本語版、2013年。
24 咸光珉『韓国の昌徳宮後苑における「扁額」と「詩文」からみた造園空間の特徴に関する研究』千葉大学学位申請論文、2015年。
25 尹張燮『韓国の建築』（西垣安比古訳）中央公論美術出版、2003年。
26 岡崎文彬『世界の造園Ⅱ』（前掲註２）。
27 尹張燮『韓国の建築』（前掲註25）。
28 尹張燮『韓国の建築』（前掲註25）。
29 高瀬要一「日本の方池と韓国の方池」『奈良文化財研究所紀要2001』奈良文化財研究所、2001年。尹

張燮『韓国の建築』（前掲註25）。

30 洪光杓「楽園を象徴する韓国の古庭園、雁鴨池庭園」『東アジアにおける理想郷と庭園』奈良文化財研究所、2009年、pp40－61。

31 National Research Institute of Cultural Heritage Research Division of Natural Heritage『Scenic Sites of Korea』（DVD）2016年。尹張燮『韓国の建築』（前掲註25）。外村中『日韓の假山趣味』57（３）、1994年、pp.258－271。

32 尹張燮『韓国の建築』（前掲註25）。

33 小口基實『韓国の庭苑』小口庭園グリーンエクステリア、1999年。金鍾龍・朴仁煥「大韓民国内に造成された日本式庭園の特性研究」『ランドスケープ研究（オンライン論文集）』10（０）、2017年、pp 134－141。尹張燮『韓国の建築』（前掲註25）。

34 中島義晴「中世日本における境致の概念および庭園との関連」『中世庭園の研究－鎌倉・室町時代－』奈良文化財研究所、2016年、pp.172－182。

35 関口欣也「中国江南の大禅院と南宋五山」『仏教芸術』144、1982年。

36 蔡敦達「中世の禅院空間に関する研究－境致を中心として－」東京大学博士論文、1994年。

37 外山英策『室町時代庭園史』岩波書店、1934年。

38 蔡敦達「中世の禅院空間に関する研究－境致を中心として－」（前掲註36）。

39 稲次敏郎「韓国庭園考 ： 作庭されない庭園」『宝塚造形芸術大学紀要』８、1994年、pp35－66。

40 野村孝文『朝鮮の民家 ： 風土・空間・意匠』学芸出版社、1981年。

41 朱南哲『韓国の伝統的住宅』（野村孝文訳）九州大学出版会、1981年。

42 稲次敏郎「韓国庭園考 ： 作庭されない庭園」（前掲註39）。

43 野村孝文『朝鮮の民家 ： 風土・空間・意匠』（前掲註40）。

44 朱南哲『韓国の伝統的住宅』（前掲註41）。

45 金永彬・安啓福「古文献分析による韓国における別墅の概念に関する研究」『造園雑誌』49（４）、1986年、pp.269－280。

46 朱南哲『韓国の伝統的住宅』（前掲註41）。

47 稲次敏郎「韓国庭園考 ： 作庭されない庭園」（前掲註39）。

48 稲次敏郎「韓国庭園考 ： 作庭されない庭園」（前掲註39）。

49 鄭泰烈・斉藤潮・金在浩「韓国の伝統的な村落における眺望について：宗家と亭の関係に着目して」『都市計画』48（４）、1999年、pp67－78。

50 野村孝文『朝鮮の民家 ： 風土・空間・意匠』（前掲註40）。

51 稲次敏郎「韓国庭園考 ： 作庭されない庭園」（前掲註39）。

52 金永彬・安啓福「古文献分析による韓国における別墅の概念に関する研究」（前掲註45）。

53 尹張燮『韓国の建築』（前掲註25）。金眞成「瀟灑園の空間構成と変遷に関する研究」『日本庭園学会誌』（20）、2009年、pp21－32。국립문화재연구소자연문화재연구실（천연기념물센터）『원림 복원을 위한 전통공간 조성기법연구 명승 제40호 담양 소쇄원』、2015年。

54 National Research Institute of Cultural Heritage Research Division of Natural Heritage『Scenic Sites of Korea』（前掲註31）。

55 岡崎文彬『世界の造園Ⅱ』（前掲註２）。小口基實『韓国の庭苑』（前掲註33）。

56 西垣安比古「背山臨水して「すまう」こと ： 俛仰亭宋純をめぐって」『日本建築学会計画系論文報告集 409（０）』、1990年、pp.143－149。

57 崔賢妊・下村彰男・小野良平「『星山別曲』にみる物境，情境，意境概念に着目した息影亭の景観構造」『ランドスケープ研究』78（５）、2015年、pp461－466。

58 白志星・徐聖澈・金根鎬「孤山尹善道の曲水堂庭園の空間構成と水景手法に関する考察」『日本庭園学会誌』21、2009年、pp21－29。金眞成・藤井英二郎「朝鮮時代の儒学者・尹善道に係わる庭園の構成とその特徴」『ランドスケープ研究』61（５）、1998年、pp.409－412。金真成・藤井英二郎・白志星「朝鮮時代の儒学者・尹善道の甫吉島芙蓉洞庭園に関する研究」『千葉大学園芸学部学術報告』(52)、1998年、pp.123－130。국립문화재연구소자연문화재연구실（천연기념물센터）『원림　복원을 위한 전통공간 조성기법연구２ 보길도 윤선도 원림（명승제34호）』2012年。

59 日本語訳は以下の文献による。瀬尾文子『時調四四三首選』育英出版社、1997年。

60 尹張燮『韓国の建築』(前掲註25)。小口基實『韓国の庭苑』(前掲註33)。

61 岡崎文彬『世界の造園Ⅱ』(前掲註２)。金睿麟・大野暁彦・三谷徹「韓国別墅庭園からの可視領域分析による景観特性の研究」『環境情報科学学術研究論文集』(29)、2015年、pp.37－42。

62 尹張燮『韓国の建築』(前掲註25)。小口基實『韓国の庭苑』(前掲註33)。金睿麟・大野暁彦・三谷徹「韓国別墅庭園からの可視領域分析による景観特性の研究」(前掲註61)。

63 National Research Institute of Cultural Heritage Research Division of Natural Heritage『Scenic Sites of Korea』(前掲註31)。

64 岡崎文彬『世界の造園Ⅱ』(前掲註２)。

65 小口基實『韓国の庭苑』(前掲註33)。

66 稲次敏郎「韓国庭園考 ： 作庭されない庭園」(前掲註39)。

67 尹張燮『韓国の建築』(前掲註25)。

68 稲次敏郎「韓国庭園考 ： 作庭されない庭園」(前掲註39)。

69 元貞喜・白在峯「韓国・朝鮮時代の伝統的池塘庭園の作庭手法に関する研究」造園雑誌　54（５）、1990年、pp. １ － ６ 。

70 山崎 宏・兼岩正夫編『新版世界史事典』評論社、1991年。

71 芳賀幸四郎『東山文化の研究』川出書房、1945年。

72 田中正大「禅宗の石庭」『禅寺と石庭 ブックオブブックス日本の美術』15、小学館、1971年。

73 藤堂明保編『学研漢和大字典』学習研究社、1980年。

74 中西 章『朝鮮半島の建築』理工学社、1989年。

75 安啓福「韓国の樓亭に現れる景観処理技法に関する研究」『造園雑誌』55（１）、1991年、pp.19－26。

76 鄭泰烈・斉藤潮・金在浩「韓国の伝統的な村落における眺望について：宗家と亭の関係に着目して」(前掲註49)。

77 National Research Institute of Cultural Heritage Research Division of Natural Heritage『Scenic Sites of Korea』(前掲註31)。中西 章『朝鮮半島の建築』(前掲註74)。

78 岡崎文彬『世界の造園Ⅱ』(前掲註２)。尹張燮『韓国の建築』(前掲註25)。中西章『朝鮮半島の建築』(前掲註74)。국립문화재연구소자연문화재연구실（천연기념물센터）『원림 복원을 위한 전통공간 조성기법연구, 광한원（명승 제33호）』2014年。

79 日本語訳は金年泉氏による。

80 中西 章『朝鮮半島の建築』(前掲註74)。

81 국립문화재연구소자연문화재연구실『원림 복원을 위한 전통공간 조성기법연구 안의삼동일원』2016年。

82 中島義晴「日韓の庭園および景勝地における建築内部からの風景の眺望」『奈良文化財研究所紀要2018』奈良文化財研究所、2018年、pp.34－35。

83 小尾郊一『中国の隠遁思想』中央公論社、1988年。

84 桜井好朗『隠者の風貌』塙書房、1967年。

85　金眞成 ・藤井英二郎「朝鮮時代の儒学者・尹善道に係わる庭園の構成とその特徴」（前掲註58）。
86　桜井好朗『隠者の風貌』（前掲註84）。
87　川瀬一馬『夢想国師　禅と庭園』講談社、1968年。
88　小口基實『韓国の庭苑』（前掲註33）。

参考文献

（사）한국전통조경학회『最新동양조경문화사』、2016年。
イ・ウンソク、ファン・ビョウンソク『韓国歴史用語辞典』（三橋広夫、三橋尚子訳）明石書店、2011年。
韓永愚『韓国社会の歴史』（吉田光男訳）明石書店、2003年。

挿図出典

第12・13図　국립문화재연구소자연문화재연구실（천연기념물센터）『원림 복원을 위한 전통공간 조성기법연구 명승 제40호 담양 소쇄원』、2015年。
第19図　국립문화재연구소자연문화재연구실（천연기념물센터）『원림 복원을 위한 전통공간 조성기법연구 2 보길도 윤선도 원림（명승 제34호）』、2012年に加筆。
第20～23図　국립문화재연구소자연문화재연구실（천연기념물센터）『원림 복원을 위한 전통공간 조성기법연구2 보길도 윤선도 원림（명승 제34호）』、2012年。
第33図　국립문화재연구소자연문화재연구실『원림 복원을 위한 전통공간 조성기법연구 안의삼동 일원』2016年。
上記以外はすべて筆者撮影による。

한국정원사략과 그 대표적 사례

中島 義晴・内田 和伸（나카지마 요시하루・우치다 가즈노부）

요 지 한국의 정원사에 관해 종합적으로 일본어로 기술된 서적은 현재까지 출판된 적이 없다. 따라서 본고에서는 명승으로 지정된 정원과 문헌에서 알려진 사례로부터 중요 사례를 선별하여 선행연구를 바탕으로 궁전・별궁, 사찰, 주택・별서(別墅)별로 각 정원의 특징을 정리하고, 루(樓)・정(亭)・대(臺)를 추가하여 한국 정원사의 전체상 파악을 목적으로 하였다.

삼국시대의 경우 고구려 산성과 백제 부여의 왕궁터에서 방형지(方形池)가 발굴되었고, 백제에서는 선산(仙山)을 본떠 연못 속에 중도(中島)를 만들기도 하였다. 통일신라시대가 되면 동궁(東宮)의 정원 등 출토 사례가 늘어난다. 고려시대는 문헌상으로 많은 정원이 알려져 있다. 조선시대에는 경복궁에서 화계식(花階式) 정원 등 현존하는 궁전의 정원을 볼 수 있다. 대한제국시대에는 덕수궁 석조전 앞 정원이 한국 최초의 서양식 정원이었다.

불교사찰에서는 고대에 만들어진 방지(方池)와 연꽃이 심어진 연못이 발굴되었다. 고려시대에는 불교가 가장 융성하였으며 원지(園池)가 만들어졌다. 또 산지 가람이 아름다운 자연환경 속에 조영되었다. 조선시대에는 배불정책(排佛政策) 하에서 지방에서 사찰이 세력을 유지되며 조용한 자연 속에 만들어진 정원 유구가 전해지고 있다.

주택 정원은 주로 조선시대의 사례가 알려져 있으며 풍수지리설에 따라 주위 환경이 중시되었으며, 부지 내 정원 시설은 적었다. 조선시대에는 관직을 지낸 많은 지식인들이 은둔하면서 별서(別墅)를 마련하여 유교적 윤리관, 풍수 및 노장사상(老莊思想)의 자연관이 반영된 정원이 조성하였다. 이들은 뛰어난 풍경지의 루, 정, 대와 마찬가지로 학문, 시영(詩詠), 문인 간 교류 등의 장소가 되었다.

주제어 : 한국, 정원, 궁전, 별서(別墅), 루(樓), 정(亭), 대(臺)

A Brief History of Korean Gardens and Its Representatives

Yoshiharu Nakajima and Kazunobu Uchida

Abstracts: There is no academic work published in Japanese that comprehensively describes the history of gardens in Korea. Therefore, the purpose of this paper is to present the historical development and characteristics of different garden types found in Korea at palaces, detached palaces, temples, residences and villas, along with the structures of towers, pavilions, and platforms considered important for viewing the landscape.

During the Three Kingdoms period, square ponds were found in the mountain fortresses of Goguryeo (Gaoguli) and ruins of the royal palace of Buyeo in Baekje, which also had a pond built with an island symbolizing the cosmological holy mountain. In the later Unified Silla period, more cases of ponds were found—such as at Donggung Palace. Gardens in the Goryeo period were represented in literature, while palace gardens from the Joseon Dynasty still exist—like the flower-storey garden at Gyeongbokgung Palace. The first western-style garden in Korea, the front garden of the stone pavilion in the Deoksugung Palace, was constructed in the period of the Korean Empire.

At Buddhist temples, the remains of ancient square ponds and ponds planted with lotus have been excavated. In the Goryeo Dynasty, when Buddhism was most prolific, garden ponds were built. Mountainous areas were favoured in the Joseon Dynasty when the popularity of Buddhism waned in favour of Taoism. However, these Buddhist temples maintained their local power, and the remains of these gardens have been handed down from generation to generation. Residential gardens are known mainly from the Joseon period and, based on the theory of feng shui, emphasis was placed on the surrounding environment with relatively few associated facilities on the grounds. Under the Joseon Dynasty scholars, serving as government officials, built villas with gardens reflecting the ideals of Confucian ethics, feng shui and Taoism. Pavilions became places for learning, poetry, and exchanges between the literati.

Keywords: Korea, Gardens, Palaces, Villas, Towers, Pavilions, Platforms, Scenery view